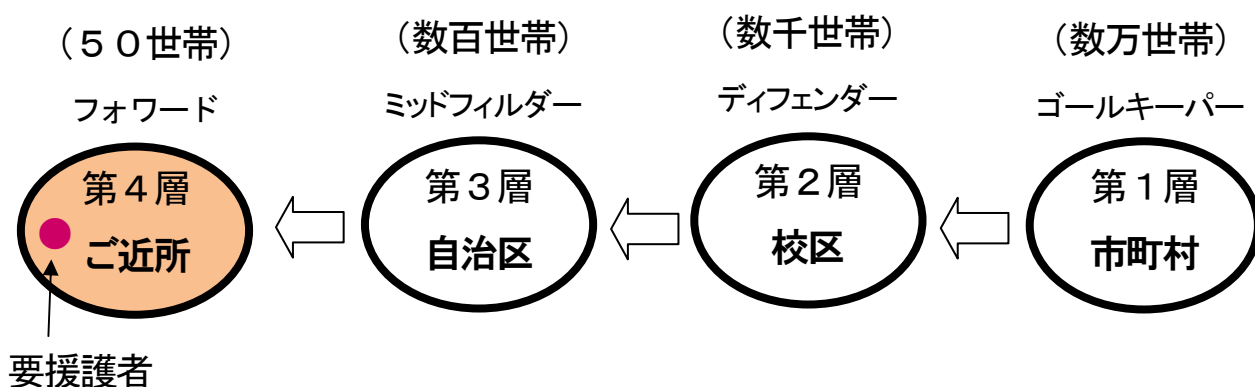


要援護者はご近所に居て、ご近所さんに頼っている。
ならばご近所福祉の充実を最優先にすべきだ。

ご近所発の 地域福祉



住民流福祉総合研究所 (木原孝久)

350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話 049-294-8284

ホームページ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~waku/>

はじめに

■「ご近所」（およそ50世帯）が存在していた！

本書は福祉関係者に馴染みの薄い「ご近所」での福祉を取り上げたものである。ご近所福祉を基点にどのように地域福祉を構築していくのか。

地域は4つの層からできている。市町村、校区、自治区、そして「ご近所」。およそ50世帯の「ご近所」が存在することを、支え合いマップづくりで発見した。

現在の地域福祉では、関係者の大部分は市町村域に居て、推進体制を作り、福祉ニーズを推測し、サービスを作り、担い手を育て、組織化し、上がってくる（はずの）申請に応えようとしている。一定のニーズは上がってくるだろうが、それは地域に潜在しているはずの膨大なニーズのほんの一部に過ぎない。大雑把な福祉と言わざるを得まい。

■ニーズ対応にはご近所を主体に関係機関の力を結集

肝心の要援護者は、市町村域から最も遠いご近所圏域にいる。その心身の状態故にご近所から出られない。彼らが自立生活を送るために頼りにしているのが、じつはご近所の支えなのだ。としたら、まずはご近所の福祉力を強化すべきではないか。

福祉ニーズはご近所から生まれる。それを各圏域の関係者の力を結集して、できるかぎりご近所で、ご近所さんを主役にして解決していく。

■マップづくりのために各層からご近所へ結集しよう

ニーズ発掘は支え合いマップでできる。マップづくりはご近所でしかできない。しかしここに地域のすべてのニーズが浮かび上がってくる。ならば、各層の関係者もマップづくりのためにご近所に結集しよう。出てきた取り組み課題を各層に振り分ければいい。関係者は、「アウトリーチ」という言葉を好んで使うが、もはや自分の拠点からどこまで「お出かけ」するかといった発想を越えて、一足飛びにご近所に駆けつけることが、今求められているのだ。

目次

- 1.地域には4つ目の「層」があった／4
- 2.「ご近所」がベストの助け合い圏域／5
- 3.要援護者は「ご近所」に居る／8
- 4.要介護でもご近所で「自分らしく」／10
- 5.「ご近所で頼り合う」ことが大切／13
- 6.「ご近所」とは、こんな世界／16
- 7.ご近所福祉活動の利点／22
- 8.ご近所の福祉力を強める／24
- 9.圏域（層）ごとの推進体制づくり／42
- 10.ご近所先行のニーズ対応／49
- 11.支え合いマップから出発／55

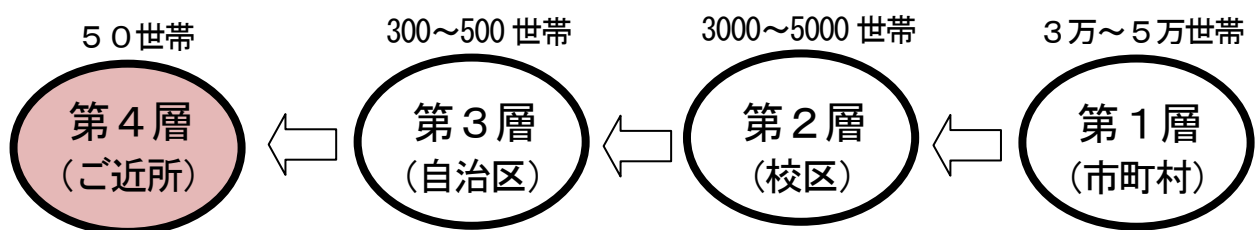
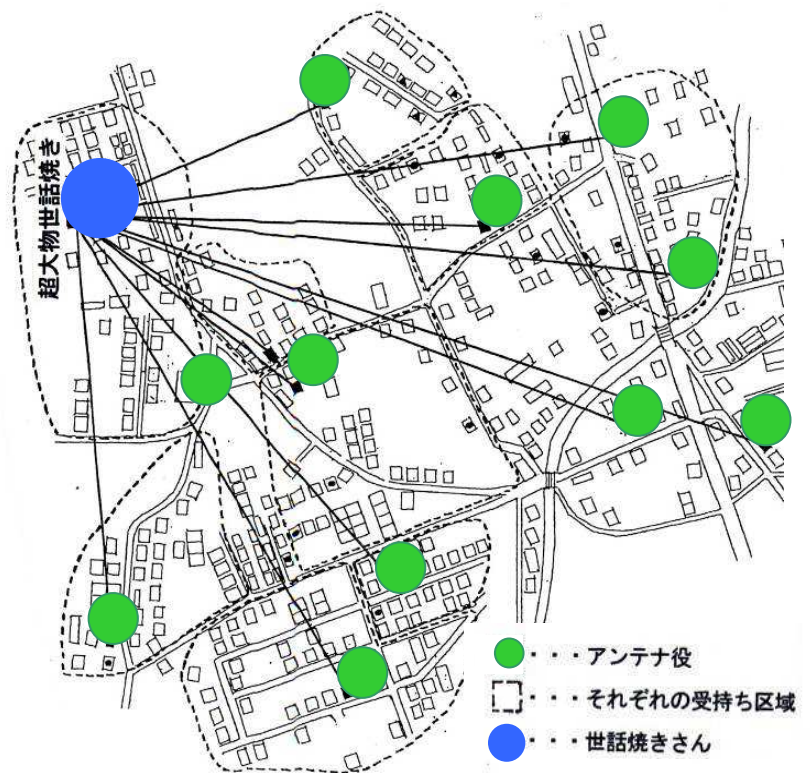
1.地域に4つ目の層があった

介護保険が行き詰まり、「要支援や要介護の人の生活支援は地域で」と国が方針を変更し、地域の中の第1層と第2層に生活支援コーディネーターを配置した。

第1層は市町村域、第2層は校区。その次に自治区の第3層もある。その自治区の次に、もう一つの層があった。

下のマップは長野県内の数百世帯の自治区。ここで活躍中の世話焼きさんに聞いてみた。「こんなに広い地域の福祉問題がよくわかりますね」。彼女は答えた。「私が見えるのは足元だけ」と点線で囲った。50世帯ぐらいた。その他の地区は、夫々問題が見える人を探して、アンテナ役になってもらっていると。

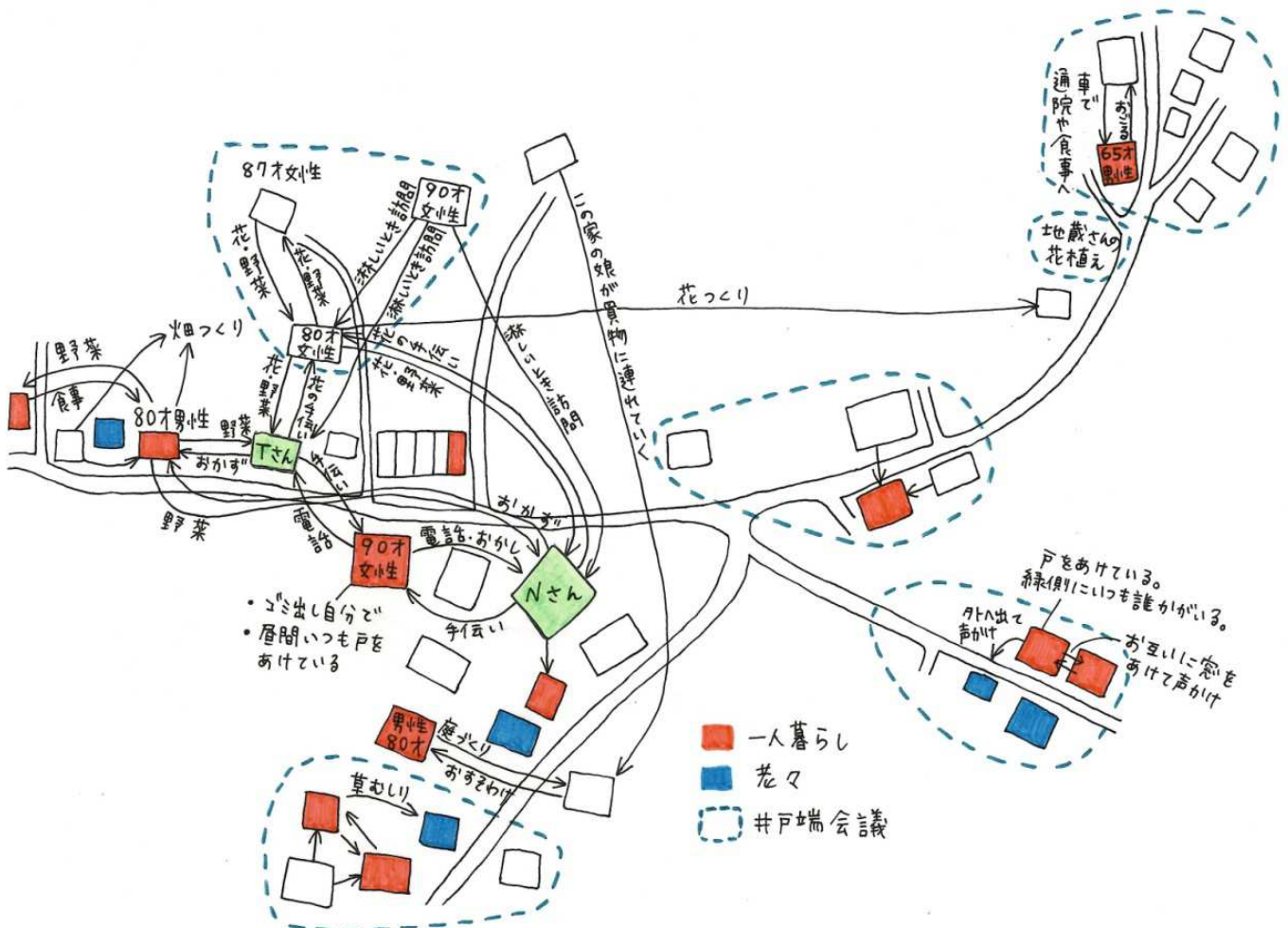
全国で支え合いマップづくり（住民の助け合いを住宅地図に乗せる）をしてきたが、住民は、およそ50世帯で何となくまとまり、助け合っていることが判った。これがいわゆる「顔が見える」範囲である。これ以上広いと駄目、という「助け合いの限界圏域」。ここを第4層で、「ご近所」と呼ぶことにした。



2.ご近所が最適の助け合い圏域

(1) 支え合いマップで浮かび上がるご近所での助け合い

たしかに支え合いマップを作ると、人々はご近所で助け合っていることがわかる。



上のマップを見ると、以下のようなことが見えてくる。

- ① 2人の大型世話焼きさん（緑色）がご近所福祉のキーマンになっている。
- ② そこで食事サービス（おすそわけ）や送迎サービス、つまり生活支援もやっているのではないかと。しかもそのほとんどは双方向で、必ずお返しがなされている。まさに「助け合い」である。それだけではない。
- ③ 要援護者である一人暮らし高齢者も、いつも戸を開けている、外へ向かって声

を掛けるなど、見守られ努力をしている。一人暮らし同士が見守り合っている。これが自助努力だ。

(2)ご近所の助け合いは、外からは見えない

これらの「助け合い」は表面では見えない。第1層や第2層からは見えないのは当たり前だが、自治区からも見えない。ご近所に住んでいても見えにくい。

なぜなのか。「助け合いは見えないようにやる」というルールがあるからだ。助けてもらおう側からは、それを見え見えでやられるのはプライドがつぶれる。できるだけ水面下で助けてほしいと願っている。

(3)支え合いマップを作ると見えてくる

ではどうしたら見えるのか。前掲の支え合いマップの結果でわかるように、支え合いマップを作るとこれが浮かび上がってくる。なぜなのか。

支え合いマップでは、ご近所内の主婦など数名に集まってもらって、要援護者は誰か、その人に関わっているのは誰かを聴取し、その関わり合いの線を結んでいく。するとご覧のとおりの結果になる。数名の情報を集約すると、なるほどAさんはBさんとCさんとDさんに関わっている、彼女は世話焼きさんだとわかってくるのだ。

(4)ご近所は助け合いのベストの圏域

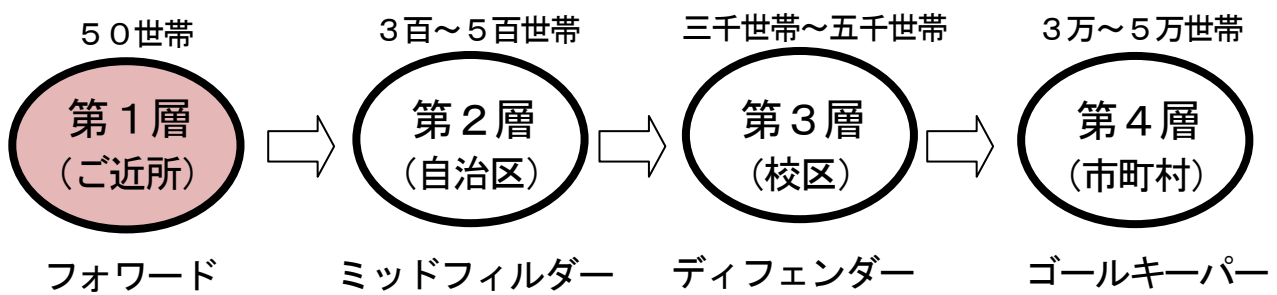
ご近所は伊達にあるのではない。永年マップ作りをしてきてわかってきたのは、人々は、「なんとなく」だが、ここがいわゆる助け合いにベストの圏域だと思っている。意図的にはやっていないが、少なくとも自治区では（広すぎて）助け合いはできないと確信している。

(6)ミッドフィルダーが試合をリードしている不思議

住民にとっては、だから、4つの層の中で最も大事なのがご近所だと思っている。ここで人々は日常的にふれあい、助け合っている。つまり第1層はここだと思っているのだ。となると、自治区が第2層、校区が第3層、市町村が第4層となる。

これをサッカーのフォーメーションと重ねると、下の図のようになる。試合は主に（ご近所の）フォワードの選手で展開する。その状況を見ながら、ミッドフィルダー（自治区）は司令塔として、球を左右に振ったりして、新しい展開をフォワードに指示する。ディフェンダー（校区・地区）は、さらに後ろに居て、ミッドフィルダーが抜かれた場合に防戦体制を取る。ゴールキーパー（市町村）はさらに後ろに居て、最大の危機に対処する。

ところが実際には、ゴールキーパーとディフェンダーが主として試合をリードしている。ミッドフィルダーには時々声がかかるだけで、フォワードは全く無視されている。これでどうやって点を取るのか、防戦するのか。



(7)まずご近所にコーディネーターを配置すべき

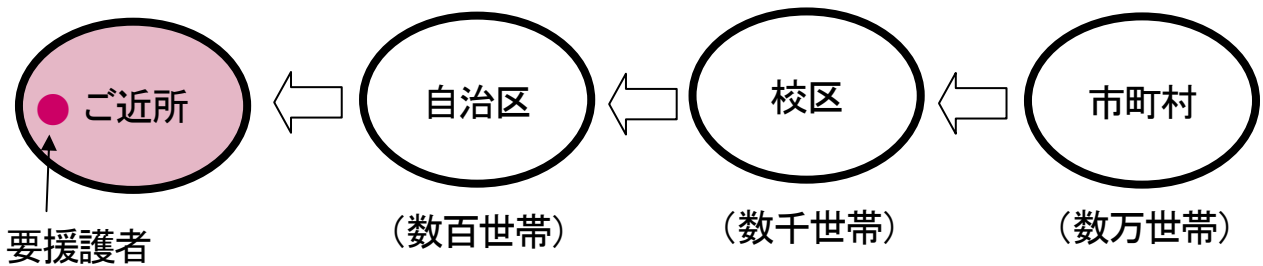
そうすると、生活支援コーディネーターの配置のあり方も見直す必要がある。今はまず第1層、次いで第2層に配置することになっている。

私どもは層の考え方を逆転させて、ご近所域を第1層、自治区を第2層、校区を第3層、市町村域を第4層とするのが正しいと規定した。

そうすると、まず第1層のご近所にコーディネーターを配置する。次いで自治区の第2層に次のコーディネーターを配置する。第3層と第4層は、成り行きでということになる。

生活支援コーディネーターがまず配置されるべきは、ご近所なのである。そこで実際に助け合いをしているから、マップづくりで把握したうえで、最大限に生かすことを考える。コーディネーターは「何をしたらいいか」などと悩むことは全くない。そこで対応しきれない部分を次のコーディネーターに繋げればいいのか。

3.要援護者は「ご近所」に居る



(1)要援護者はご近所で生活し、ここから出られない

この「ご近所」には要援護者が生活していて、自立生活をするために、ご近所さんの助けを得ている。彼らはご近所から出られない、その心身の状況からご近所外に出かけるのが辛いのだ。

次のマップを見ていただきたい。地区には要介護者だけでなく、病弱者もいる。彼らはこの地区から500メートルほど離れた公民館（マップではすぐ近くに書いてあるが）には行っていないことがわかった。要援護状態だから、行こうにも行けないのだ。ご近所の人たちはこのことを承知していた。承知した上で、その公民館でサロンや趣味活動などをしていた。



(2)だから「ご近所福祉」の充実を最優先に

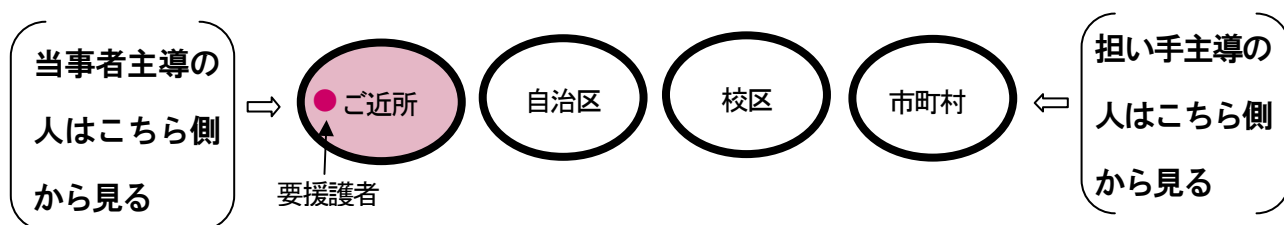
要援護者はここで自立した生活をしたいと言っている。それを支えるのが福祉の第一の役割だとしたら、まずご近所福祉を充実させねばならないのだ。自立生活に不可欠なのが、足元の人たちが日常的に見守ってくれたり、ちょっとした困り事に応じてくれることだろう。それを今、ご近所さんがやってくれている。

5頁のマップを再度見ていただきたい。例えばデイサービスから戻ってきて、娘や嫁が帰宅するまでの一時間ほどが「淋しい」と言って、近くの世話焼きさん2人の家に押しかけている女性がいますし、大抵の人は向う三軒の人からおすそ分けや送迎をしてもらうと共に、自らお返しもしている。それができる距離がご近所という所なのだ。それに一人暮らし同士が相互に見守ったり、面倒みあっている。これができるのもみんな、ご近所同士だからである。

(3)ニーズはご近所から発信される。ならばご近所へ出向くべし

福祉関係者が探している福祉ニーズはご近所から発信される。その電波は極めて弱々しく、また届く範囲が狭い。そのニーズやその生態を掴み取れば、ご近所まで足を運ばねばならない。しかもニーズは見えにくい。見える人も限られている。

関係者がご近所を無視して福祉を作れるのは、「ニーズはサービスを用意すれば自然と近寄ってくるはずだ」と単純に考えているからだ。だが実際はそうならない。生活支援関連のサービスを担っているNPOのリーダーたちに悩みを聞いたら「ニーズがやってこない」であった。

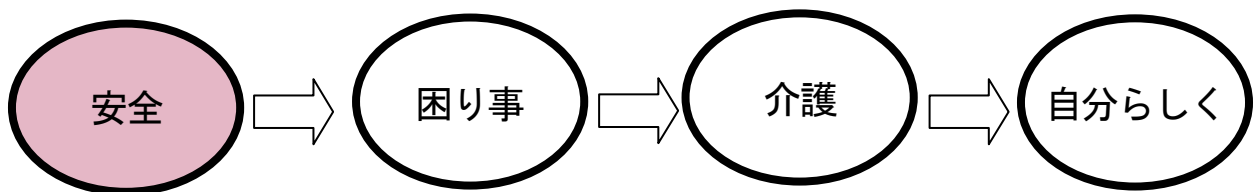


今の福祉関係者は担い手主導、上の図で示せば右側から地域を見ている。一方、当事者主導の人は、図の左側から地域を見ている。当事者本人は何を求めているのか、どうしたいのかを徹底的に読みながら対応策を考えるのだ。

4.要介護でもご近所で自分らしく

(1)「生活支援」の「生活」とは何か？

ところで「生活支援」の「生活」とはどういうものなのか。何を支援するのか。図を見ていただきたい。この中の「安全」(を守る)と「困り事」(を解決する)はわかる。次の「介護」は主にプロの役割だが、サービスの枠外のニーズは住民が手を貸さねばならない。

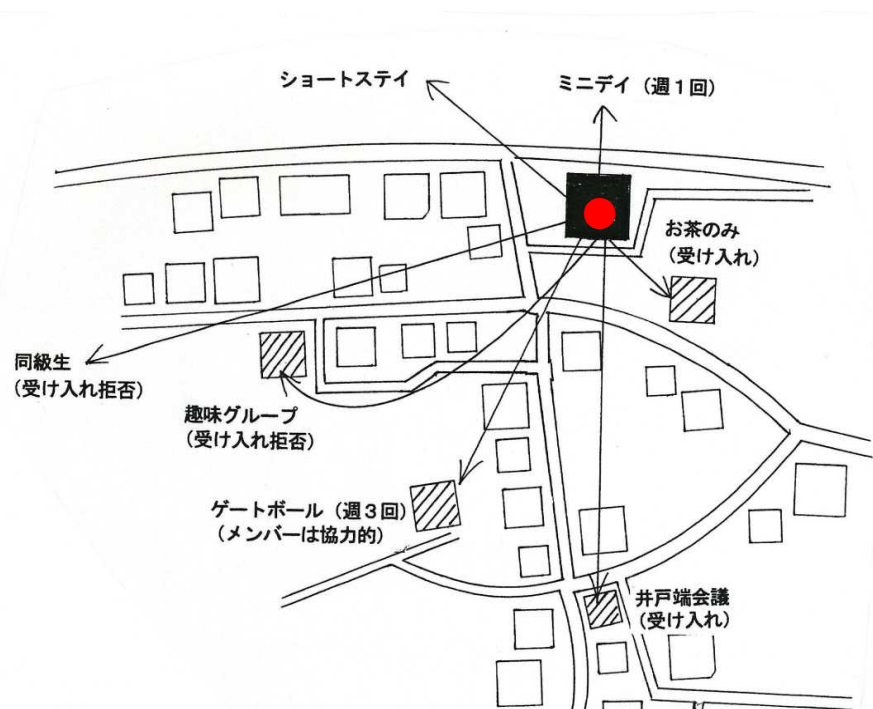


(2)めざすは「要介護でも住み慣れたご近所でその人らしく」

では右端は何を言っているのか。地域包括ケアシステムの目的で国はこう言っている。「どんなに要介護になっても住み慣れた地域でその人らしく生きていけるように」である。だから、ここまでを「生活」の範囲と見て、これが充足されていない

ければ支援しなければならないのだ。先ほどのマップで言えば、病弱で公民館まで行けないのだから、せめてご近所内に公民館(らしきもの)をつくるのが筋なのだ。

右のマップ。認知症の女性(●)が周囲のグループに「入れて！」と出かけている。同窓生は「来ないで！」。趣味グル



のグループに「入れて！」と出かけている。同窓生は「来ないで！」。趣味グル

ープも同様。ゲートボールは受け入れ。井戸端会議もお茶飲み会も受け入れ。グループが全部受け入れれば、認知症でも豊かに生きられるのだ。

そういうご近所にしていかなければならない。

(3)認知症のあの女性に「ボランティア」活動の機会を

福岡県の福津市でマップを作ったら認知症の女性が毎日「散歩」していることが明らかになった。以前、生け花の先生をしていたからか、散歩しながら人の家の玄関に活けてある花を手直ししていた。ならば生け花教室を開いて、指導してもらったらどうかと提案したら、地元の福祉会が実行した。

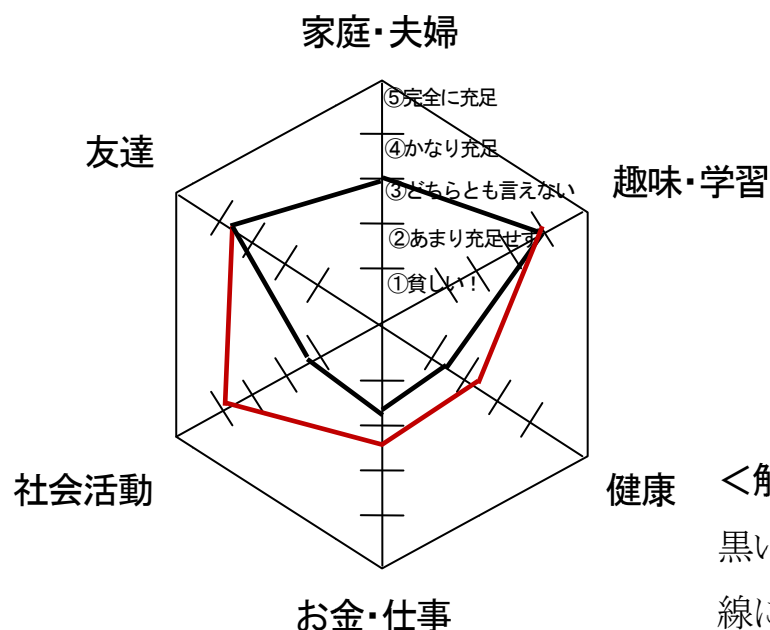
「その人らしく」とは何が充足されればいいのか。その中に「ボランティア」も含まれている。



右端が生け花の指導をする認知症の女性

(4)豊かさ度を測る物差し—ダイヤグラムを開発

本人の自分らしさがどの程度充足されているのかを測る物差しとして、豊かさダイヤグラムを開発した。項目は以下のように6つ。①仕事・収入、②健康、③趣味・



<解説>認知症の女性
黒い線だったのが、赤い線に改善された。

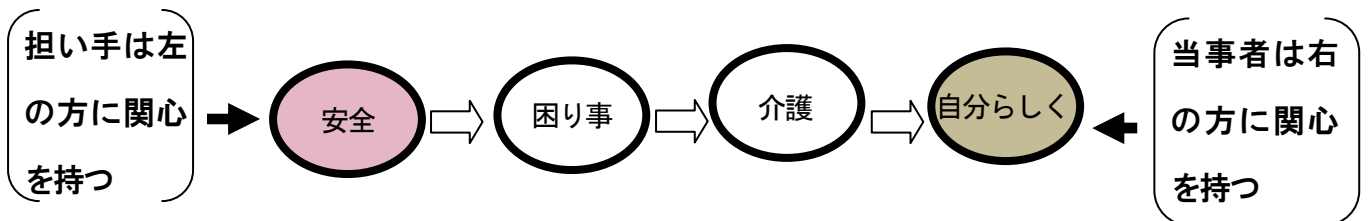
学習、④家族・夫婦、⑤友達・ふれあい、⑥社会活動。ボランティア。

認知症の80代の一人暮らしの女性。「趣味」は畑で野菜作り。収穫した野菜でおしんこを作っている。畑で隣り合った仲間（3人）とおしゃべり（「友達」）。妹がすぐ近くに住んでいて毎日様子を見に来る。娘も時々やって来る。

この女性の場合、収穫した野菜で仲間と料理作り。それなら火も使える。作ったおしんこを配れば「社会活動」。おしんこを市場で売ればお金にもなる。活動が活発になれば「健康」も改善。「趣味」も充実というわけだ。

(5)当事者は「自分らしく」にこだわっている

関係者で「その人らしく」の充足支援に関心を持つ人はいない。「それは福祉ではない」と思っているのではないか。一方の当事者は左の安全や困り事の解決よりも自分らしく生きたいということに関心を持っている。どちらを優先するか、そこで当事者主導か担い手主導か、あなたの感覚が試されることになるのだ。



(6)認知症になっても仲間に入れてあげられるか

その人らしくの実現を支援するとなると、私たちは何をすればいいのか。例えば、12ページの認知症の女性の場合なら、要は彼女が「仲間に入れてくれ!」と言っているのだから、入れてあげればいいのか。しかしそれが今は実現していない。

介護保険制度が施行されて以来、住民は要援護の人を仲間から外すようになった。趣味グループも、サロンも、老人クラブも。そのために介護保険があるのだろうと言う。入れてもらいたければデイサービスへ行きなさい。「私たちは元気な人の集まりなのだ」と。

5.ご近所で頼り合うのが大切

(1)今は当事者もご近所に頼らない。関係者も上層へ持っていく

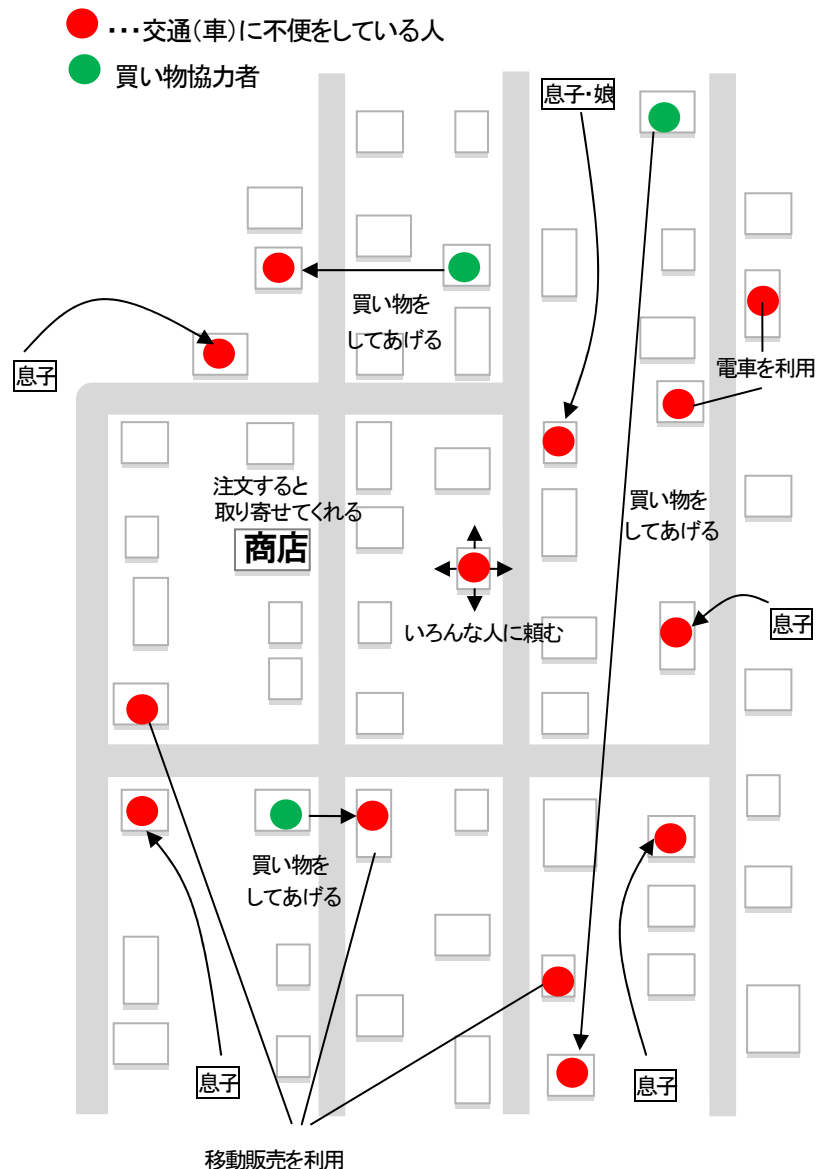
今は何か困ったことがあっても、ご近所の人に頼ることはまずしない。その関係の機関に持っていく。これではご近所の助け合い力は育ちようがない。何かあればご近所さんに頼るということを心掛けなければならないのだ。

関係機関も、ご近所で発生した問題を、いとも簡単に上の層に持って行ってしまおう。ご近所さんにはできまいと、たかをくくっている。たしかに今のところはご近所力は薄弱だが、これから班としてもこれを強めなければならない。災害時にはそのご近所さんだけで何とかしなければならぬのだから。

(2)当事者は自助努力をしていた

右のマップ。北陸地方の過疎地で、車がないと買い物も行けない。一人暮らしの高齢者は夫々どんな解決努力をしているのか調べたら、こんな結果が出た。

息子が来た時について買ってきてもらう、隣の人にお願いする、周りの人に片っ端からお願いする。一軒だけある店に、買いたいものを取り寄せてもら



う、生協の移動販売を利用する等。夫々が自助努力をしていた。

(3)夫々の資源（人材）の「余力調査」をしたら？

これだけの営みが行われているのなら、これで終わりにせず、例えばAさんの息子が来た時、隣のBさんもついでに買ってきてもらうことはできないか。

そこで「余力調査」をするのだ。夫々資源が、身内だけでなく他人のためにも機能する気があるかどうかを聴取する。

また（マップで出てきたように）、移動販売のサービスを広げられないか、ご近所に一つだけある店が、本格的に注文販売を受け入れる気はないか等も調べる。現実に機能している資源を、より強力にする手立ても考える。移動販売のことを知らない人がいるかもしれないし、唯一ある店が注文販売まで事業を広げれば、これでかなりの人の困り事が解決する。

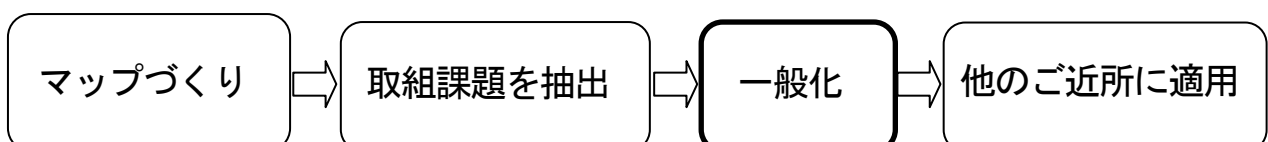
(4)ご近所内の資源を遣り繰りすれば助け合いが強まる

そんな面倒なことをしなくても、思い切って移送サービスなどのNPOを立ち上げればいいではないかと思うが、敢えてそうせずに、ご近所内の問題を解決するために、可能な限りご近所内の資源を遣り繰りすることで、ご近所の助け合いが強まっていく。これを「助け合い」というのだ。

関係者がまず心得るべきは、ご近所で発生した問題を、簡単に上層へ持ち出さないことだ。住民の解決努力を無視して、上層の移送サービスや買い物支援サービスにつなげてしまったら、住民は助け合いをやめてしまう。

(5)これを「一般化」して他のご近所にも適用を

このご近所の人たちが使っている知恵は、他のほとんどのご近所でも使えるはずである。ならば、このご近所のやり方をマニュアル化して、各自治区を通して、他のご近所でも適用できるように指導していったらどうか。



生活支援コーディネーターが、傘下のいくつかのご近所でマップづくりをすることで、一般化できる知恵が大きく膨らんでいく。一つのご近所で5つのノウハウが生まれたとする。10のご近所でマップを作れば、合計50のノウハウを獲得できる。これらを一般化すれば、膨大な生活支援のコーディネートができるではないか。しかも、国から指定されたテーマに限らず、その地域独特の生活支援課題と対応策がゾロゾロと出てくる。

(6)ご近所在住の生活支援コーディネーターがいれば

ご近所に生活支援コーディネーターが配置されていれば、もっと効率的になる。ご近所内の課題が出てくれば、それを校区の生活支援コーディネーターと共同で一般化の作業をしていく。マップづくりはご近所圏域のコーディネーターに委ねられるから助かる。

13頁のマップは、ご近所内の世話焼きさんたちから聞き出したものであるが、その中に地区社協の人も混じっていた。地区と言ってもここでは数百世帯規模だから、一般的には「自治区」に相当する。それにしても彼女はこのご近所内の助け合いにも精通していた。

この人が生活支援コーディネーターになれば、例えばAさんから「今日、買い物をしたいのだけれど、伝手が無い」と困っていたとする。たまたまその近くのBさんの息子が今日は里帰りを知っているから、「Bさん、ついでにAさんの買い物も息子さんに頼んでくれないかねえ」と言えるのだ。ご近所圏域のコーディネーターはまずもってご近所内の人のふれあいや助け合いの実態をかなり細かい所まで知っていなければならないのだ。

6. 「ご近所」はこんな世界

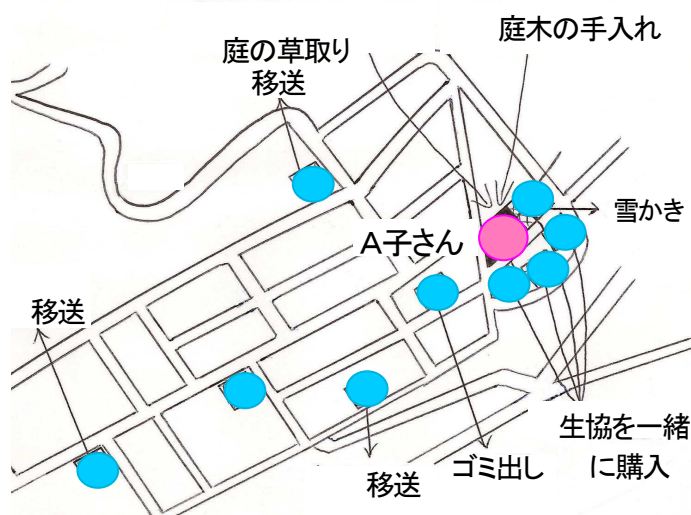
ご近所という所は、単に4つの層の1つに過ぎないのではない。ご近所には独特の住民の流儀が働いている。これを知らないでは、住民とうまくやっていけない。

(1)当事者が主役

①支援者を自分で探して活用している

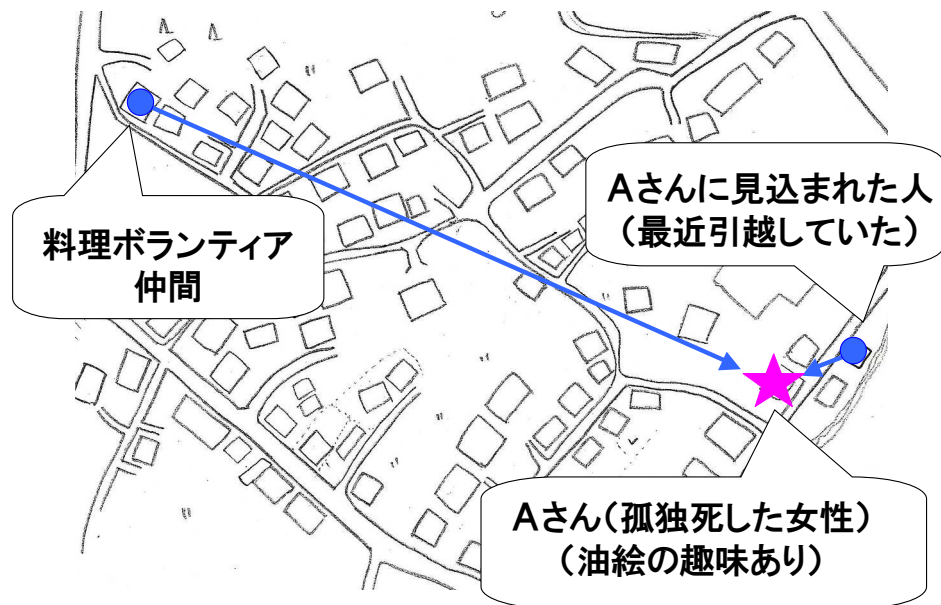
当事者主役は、地域全域で貫かれている原則だが、ご近所では特にこの原則が厳しく適用されている。4ページのマップを見ても、当事者が自分の支援者を選択し、活用している。一人暮らしの人も自らの安全を保持するための努力をしている。

下のマップ。老々で共に要介護という大変な家だが、奥さん（A子）が「助けられ上手さん」で、周りの人にあれこれお願いしていた。あなたはゴミ出しを、あなたは庭木の剪定を、あなたはバス停まで私を送ってとか。



②引きこもりの人も支援者を発掘・活用していた

引きこもりの人はどうなのか。次ページのマップは、死後2週間で発見された一人暮らし女性。マップ作りの際、はじめは「誰も見守っていなかったから亡くなった」と町内会役員は言っていたが、最終的には女性と関わりのあった人が2人見つかった。右側の人には本人が「何かあったら頼むね」と言っていたそうだ。



③自助力とは「助けられ上手」のことだった

当事者が主役だということは、当事者に主導権があると共に、主体者としてふさわしい行動を取らねばならないということでもある。「ふさわしい行動」とは以下の通り。だから、福祉は当事者が自らの安全を守るためにどういう行動を取るかが、最も重要なことで、それを周囲がどのように後押しするかが、次なる課題になるのだ。以下の中で重要なのが④である。これができる人を「助けられ上手さん」と言っている。この5つの努力をすることを自助努力と言う。今の福祉は当事者主体の理解が進んでいないために、本人の自助努力を促すことにあまり熱心ではない。

- ①自分の運命の主人公は私である。
- ②私の抱えた問題の解決策は私が考える。
- ③解決するための自己努力を欠かさない。
- ④必要な資源は私が発掘し、活用する。
- ⑤同じ問題を抱えた者同士、助け合う。

(2)担い手と受け手という区別をしない

福祉とは担い手が受け手にサービスをすることだという常識は、ご近所では通用しない。ここでは受け手が容易に担い手になったり、担い手同士が関わり合ったりする。

①誰が担い手でだれが受け手か？

支え合いマップを作ると、興味深い事実を発見する。下の写真は輪島市で見つけた事例で、ベッド生活の一人暮らし女性Cさん（右端）宅で開かれているサロンである。そこに周囲の高齢者たちがおしゃべりにやってくる。その中に認知症の女性もいる。Cさんがデイサービスから戻ったのを見計らって寄り集まって来るらしい。ここで言えることは、

- ①誰が福祉の担い手で誰が受け手なのか。お互いが受け手であり担い手でもある。
- ②おしゃべりの中で問題が解決されている。誰が誰にサービスしたか分からない。
- ③それ以前にこの営みの主催者は誰かもはっきりしない。



②最重度者がなんと助け合いのキーマン

北海道のある地区（50世帯ほど）では、要援護者たちが助け合っていた。主役は一人暮らしのAさん。半身マヒの車いす生活だが、その家へ、市外から転入してきて寂しがっている女性がたまに泊りに来る。昼間一人暮らしで認知症の出てきた女性も招かれている。担当の民生委員が施設に入所しているBさんを見舞いに行ったら、「里帰りしたい」と言う。しかしBさんの家は既に空き家。ならばと、Aさんが自宅に受け入れてくれた。

③要援護者（受け手）こそ担い手になりたがっている

川崎市の介護ボランティアグループ「すずの会」に、ケアマネから老々世帯のケースが持ち込まれた。夫に癌が見つかった。妻（K子さん）は要介護3で障害もある。「どちらかが施設に入らないと共倒れになる」とケアマネが説得したが、2人は「自宅で頑張る」の一点張り。

すずの会はどうしたかという、なんとK子さんの家でサロンを開いてもらった。そこに近隣の人に来て、ふれあいが実現。趣味活動もできる。夫との生活も継続できる。斜向かいに80歳でうつ状態の一人暮らし女性（T子さん）がいる。グルー

プは彼女に「K子さんのサロンを手伝ってね」とお願いした。一方のK子さんには「T子さんの面倒を見てね」。両者が「私もボランティアだ」と張り切った。その後K子を診察した担当医が、「要介護度が下がっている」とビックリ。

(3)私的な関係

①向こう三軒で移送サービス。事故が起きたらどうするか

一人暮らしの高齢女性を、隣家の男性が病院まで車で運んであげている。それを知った人が私にこうやってきた。「こんなことをやっていて、もし事故が起きたらどうするんでしょうね」。この質問を、移送している男性にぶついたら、何と云うか。「そんなうるさいことを言うなら、やめた」と、引いてしまうだろう。たしかに事故が起きたらという疑問はあるが、実際は両者の信頼関係で行われている。

もしこれが自治会の福祉サービスの一環で行われたらどうなるか。まず事業の趣意書をまとめる。主催者や担当部署、担い手と受け手の関係のあり方や、経費負担、事故が起きた時の保証などを規約に盛り込むだろう。同じ地域で行われる移送にこれだけの違いがある。

②ご近所は私的な営み。自治区は公共的営み

前者は「私的な営み」と考えたらどうか。双方の自由意思と信頼関係、そして責任において、実践されている。だから規約云々は関係ない。「もし事故が起きたら」と言い出す人は「公的な営み」という別の論理を持ち出したことになる。

個人の意思を超えて、住民全体が共同意思で、組織的に福祉の営みを実施する。そこに個人的な事情は差し挟まず、ありうる事態をすべて規約として設定し、全員がそれに従う。

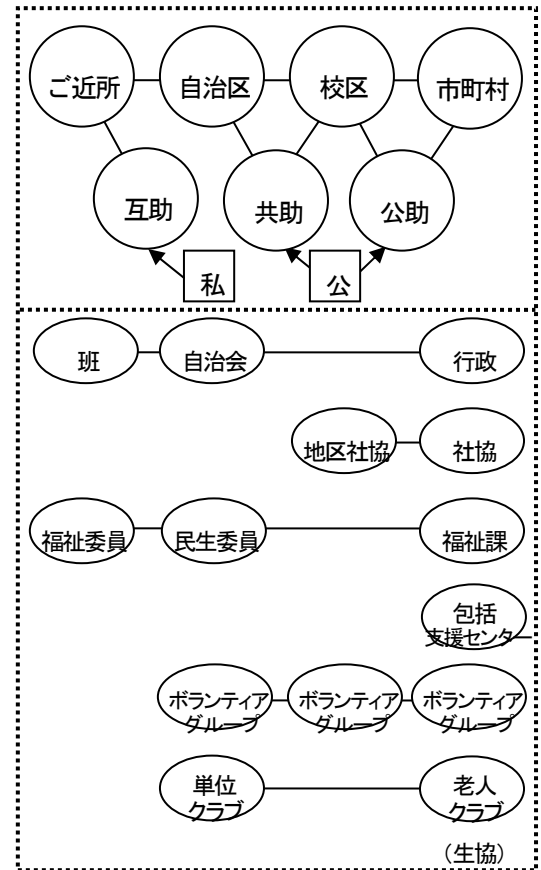
同じ論理で、町内会長が、公的営みたるサロンに参加しないとほけしからんと憤慨するし、民生委員が、担当の相手が私の訪問を嫌うとはけしからんと思うわけだ。

地域、特にご近所で「私と公の衝突」が起きている。事実上、私的な営みが支配しているご近所に、公的な営みが踏み入って公然と実践されている場合、常に「私と公の衝突」が起きているのだ。

③ご近所に踏み入れば、私的な営みのルールに従おう

この図を見ていただきたい。地域での住民による福祉の営みの多くが公的な営みである。その一部がご近所にまで踏み入っている。福祉推進員と呼ばれる人がそうだし、見守り隊などのボランティアも同様。要援護者の自宅に入り込む人材を、当人が私的な営みと見るか、公的な営みと見るかで対応が異なってくるわけだ。

公的な営みのつもりでご近所に踏み入る人材が、可能な限り私的な営みの世界に同調しようとするれば、丸く収まる、ということと言える。



④相性が合わないと駄目

ご近所では、相性が絶対的に重要である。相性が合わない同士が助け合いをするなんて、ありえないのだ。ところが公共的営みの中では、相性など考慮されない。

⑤1対1のやり取り

私たちが福祉活動をする時は大抵、相手を特定の問題に絞り込み、該当する要援護者をかき集め、1か所に集めて、一律（十把ひとからげ）のサービスをする。こういうのが公的な営みであろう。私的な営みだと、特定の相手（一人）と特定問題についての善意のやり取りをする。2人にしか当てはまらないテーマであり、やり方である。

(4)双方向

ご近所では、いわゆる「サービス」という考え方はない。ここでは原則として善意のやり取りは双方向でなければならない。○ページのマップを見直してみると、

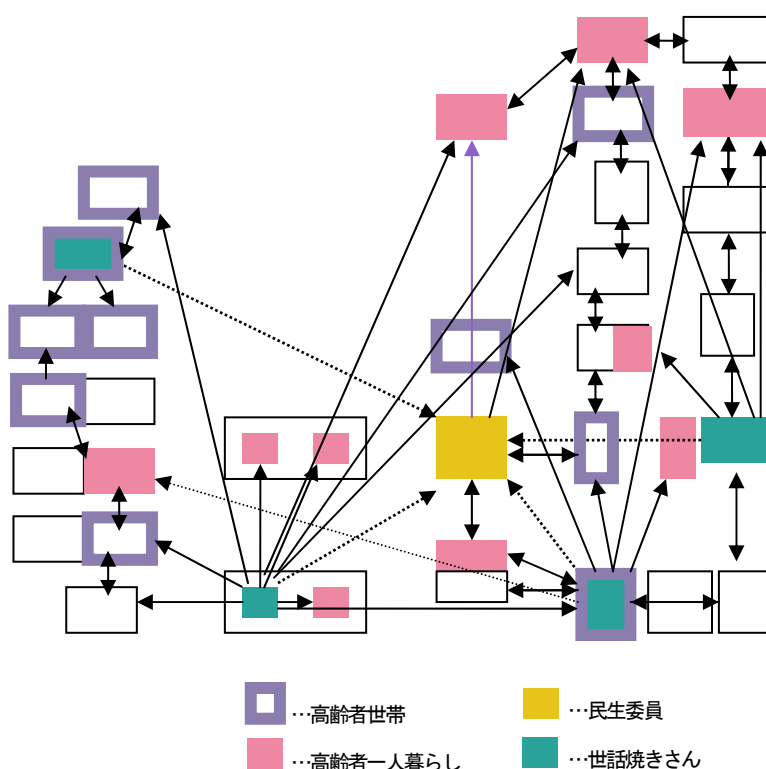
助け合いは文字通りに双方向になっている。一方が相手に「おすそ分け」をすると、必ず「お返し」がある。食事のおすそ分けをすると、畑で獲れた野菜のお返しがなされる。病院まで送迎をしてあげると、帰りにレストランでの食事は、送迎してもらった方が払う、といったように。

(5)実力主義

地域福祉関係者は、ご近所にまで地域福祉推進体制の一環で養成、または委嘱した福祉委員等を配置する。自治会は班長に小地域福祉を担ってもらおうとしている。

足元から福祉ニーズを掘り起こし、それに関わるのは非常に難しいし、それなりの資質がなければつとまらない。だから住民はその点では妥協はしていない。ご近所には、人を助ける天性の資質を備えた世話焼きさんが複数いて、緩やかに連携してご近所福祉を実践している。「困った人がいると、気になってご飯が喉を通らない」と彼らは言う。天性主義に切り替えない限り、今の地域福祉がこれ以上改善されることはない。

右のマップでは、最下段の2人（緑）が大型世話焼き。一人当たり10名の面倒を見ている。中段の左右の2人が中型。一人当たり5名程度の面倒を見ている。その他の人（■にはしていないが1人～2人に関わっている人）たちが小型だ。



7. ご近所福祉活動の利点

ご近所ごとに小地域福祉を進めれば、いろいろメリットがあることが分かる。

(1) 世話焼きさんが活躍

世話焼きさんはご近所で活躍している。大中小の世話焼きさんの多くがご近所圏域に居る。自治区以上は広すぎて「手に負えない」と思っているようだ。と言うことは、地域の福祉の主な人材はなんと、ご近所圏域にいるということなのだ。

自治区や校区でも活躍できる人（超大型世話焼きさん）が、たまにいるが、なかなか見つけにくい。この圏域で求められている人材は、仕掛け屋さんだ。ご近所での世話焼きさんの活動をバックアップし、難問は上層の機関に繋げられる人。

(2) 福祉問題が見えやすい

世話焼きさんが関わっている相手を見ると、自宅のすぐ近くの人ばかり。その相手の状況ならわかるのだ。虐待なども見える。だからご近所に虐待などの探知拠点を設ければいい。

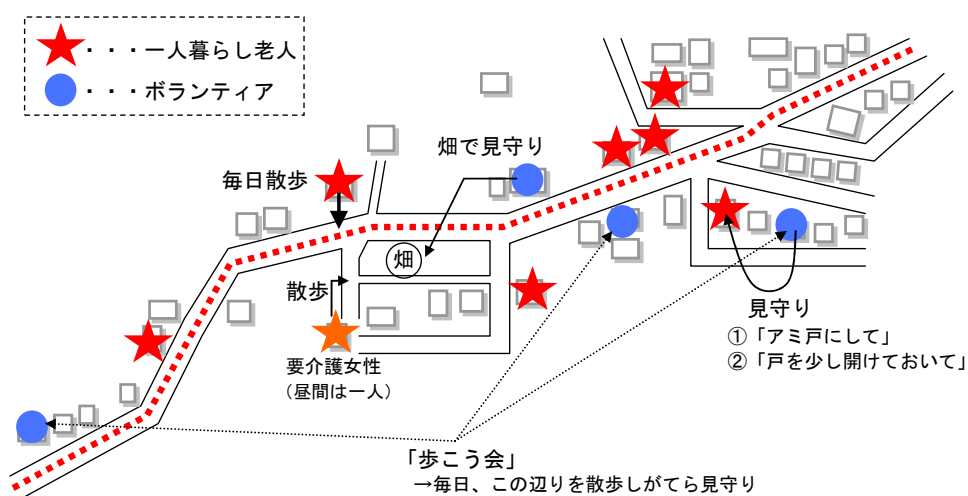
(3) 深刻になる前に対処

インターネットにこんな話があった。アパートに住む若い夫婦。ベランダで隣の部屋とつながっているが、その隣家から子どもの「ごめんなさい、もうしません」と泣き叫ぶ声と大人の怒鳴り声が聞こえてきた。

その後、夫婦のふざけ声とともに、ゴロゴロという音が聞こえてきた。ベランダに置かれた洗濯機に子どもを入れた後、本当にスイッチを入れたようだった。くぐもった子どもの悲鳴と水の音。それを聞いた若夫婦は飛び起きたが、警察を待っている余裕などない。夫は躊躇なく「警察呼べ！捕まったらごめん！犯罪者になっても許してくれ」と叫びながらベランダに飛び出し、隣家との間の仕切りの板を蹴り破って介入した。その結果、危機一髪で子どもは救われたという。

(4)生活の中で要援護者に関われる

住民は生活の接点で出来ることをやっている。下のマップ。一本の道沿いに人々が住んでいる。3人の主婦が「お散歩の会」をつくって、毎日、左から右へ歩くことにしている。その際「ついでに」と、道沿いに住む一人暮らし高齢者の安否を確認することにした。見守りにくい家には「アミ戸にしておいて」とか「戸を開けておいて」とお願いする。そうやって見守りお散歩が終了すると、この道のずっと右に住んでいる民生委員に結果報告をするのが日課になっていた。



(5)緊急事態にも即応できる

隣人の要援護者に関わっているから、緊急事態にも対応できる。夜中でも大丈夫。特に災害の場合、救援に駆けつけられるのは、向う三軒両隣の数名のみだ。

(6)要援護者も、足元からなら資源を発掘・活用しやすい

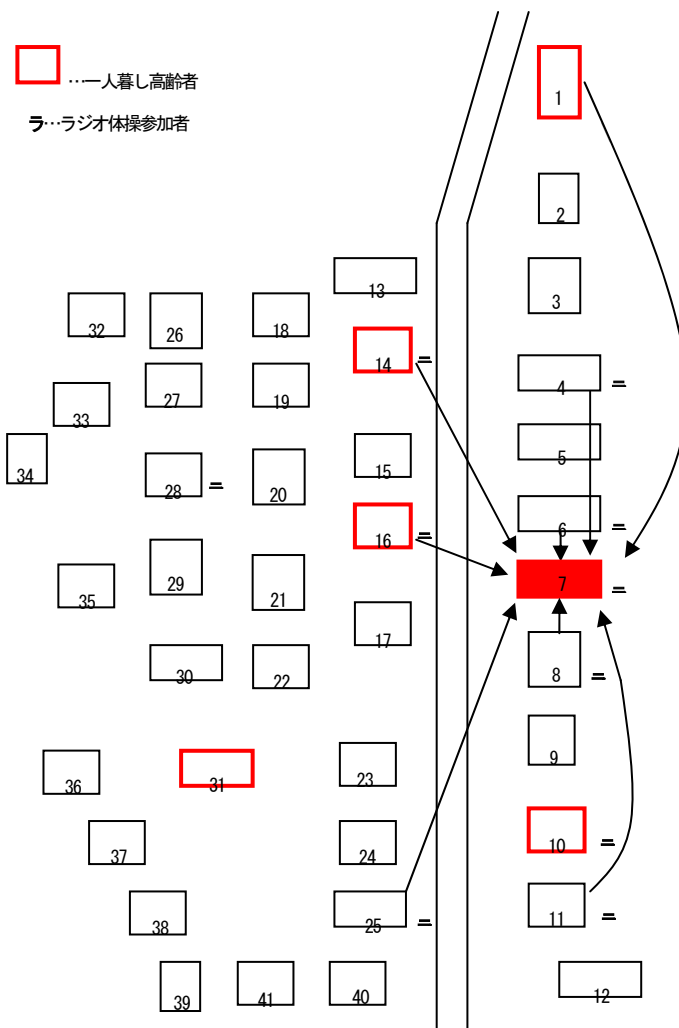
要援護者にとってご近所がいかに都合の良いものであるかは、9ページのマップでもわかる。要援護者自身をご近所から自分に必要な資源を発掘し、活用している。ご近所福祉が充実しやすいのは、ただ周りの人が見守りやすいとかちょっとした関わりでいいというだけでなく、当事者自身、自分の周りから資源を発掘すればいい、つまり助けられ努力がやり易い条件が整っているのだ。自助努力と共助の努力がご近所ではうまく合体しやすいのである。

8.ご近所の福祉力を強める

ご近所でできる限り助け合おうと言っても、ご近所の助け合い力はまだまだ弱い。何とかこれを強めていかねばならない。そのためには、様々な角度から取り組む必要がある。

(1)当事者の「助けられ力」を強めさせる

ご近所は当事者主導の世界だと述べた。ご近所では、当事者が自分の助け手を発掘し活用するのか原則であるらしい。むろんそういう人ばかりではないが、原則はそういうことらしい。ならば当事者に主体者としての自覚を持って、自分に必要な資源を自力で発掘・活用するよう指導していく必要がある。



前頁のマップでは、ご近所の人たちで毎日、ラジオ体操をしていた。それはそれとして、ラジオ体操が終わると、赤印の女性（90歳の一人暮らし）が、「うちへお茶飲みに来ない？」と誘っていた。そうやって、毎日のご近所さんを家に引き入れていた。そうやって、いざというとき助けてくれる人を確保しようとしているのだ。

(2)家族・親族の結束力を最大限に活用

①「スープの冷めない距離」に息子が近居

最近、近居が広がっている。子ども夫婦が「スープの冷めない距離」に住むというあり方だ。

次のマップを見ていただきたい。三重県内のあるご近所でのマップづくりで見えてきたことだが、こんなにもたくさんの家族が、同じご近所内で近居していた。



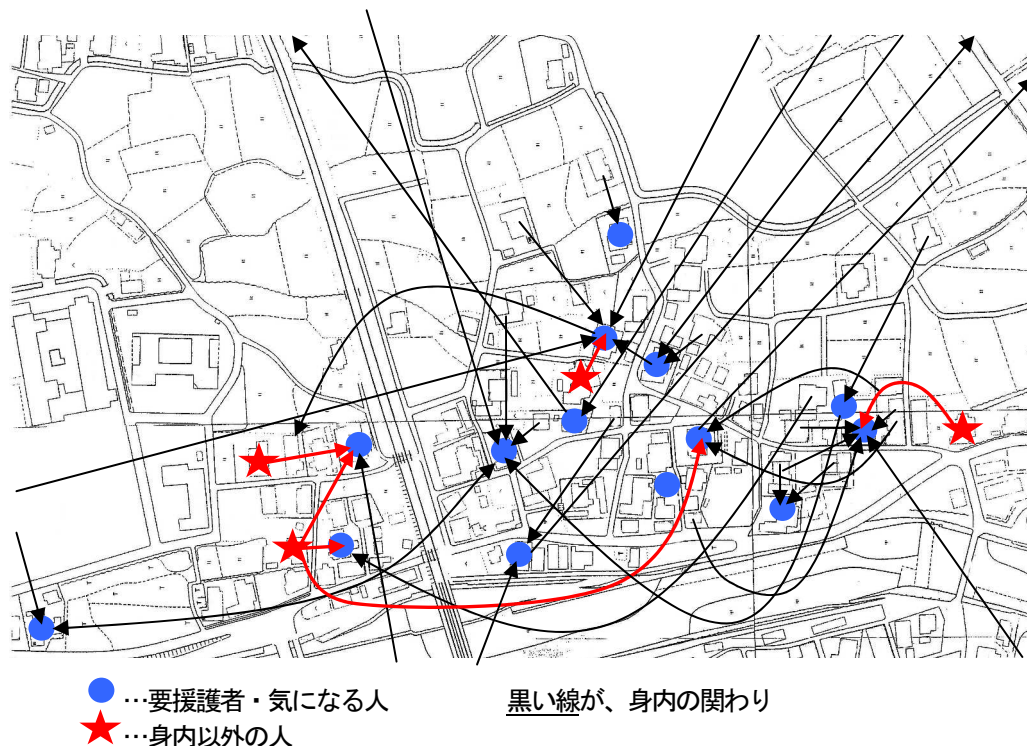
これでご近所の福祉力は相当高まったと言えるべきだろう。これだけの数の子ども夫婦が同じご近所に住み続けるわけだから、たいへんな少子化対策ともいえる。

②親族ネットワークはまだ生きている

今の日本ではまだ「身内」が生きている。都市部では想像もつかないだろうが、

地方に行くと助け合いの主力は身内のネットワークである。次のマップを見ていただきたい。要援護者に関わっている人の線を引くと、このようになった。この中の黒い線はすべて親戚からの関わりなのだ。赤い線がかろうじて数本は入っているが、これが他人からの線。いずれも世話焼きさんだった。

良くも悪くもこれが現実なのだから、この身内のネットワークを最大限生かす方法を考えなければなるまい。



(3)活動グループがご近所へ戻って助け合い

①趣味グループや地域組織がご近所で助け合い

地域にはさまざまなグループができています。趣味グループやボランティアグループ、老人クラブや生協などのグループもあります。ところが意外なことに、彼らは主目的の活動はするが、助け合いは期待されたほどにはやっていない。日本人の発想から言えば、これらも「身内」の一つではあるのだが…

助け合いがやりにくい理由の一つは、それが校区や自治区の圏域で作られた組織である点だ。だから、活動が終わればそれぞれの地元へ戻るだけ。お互いの生活状

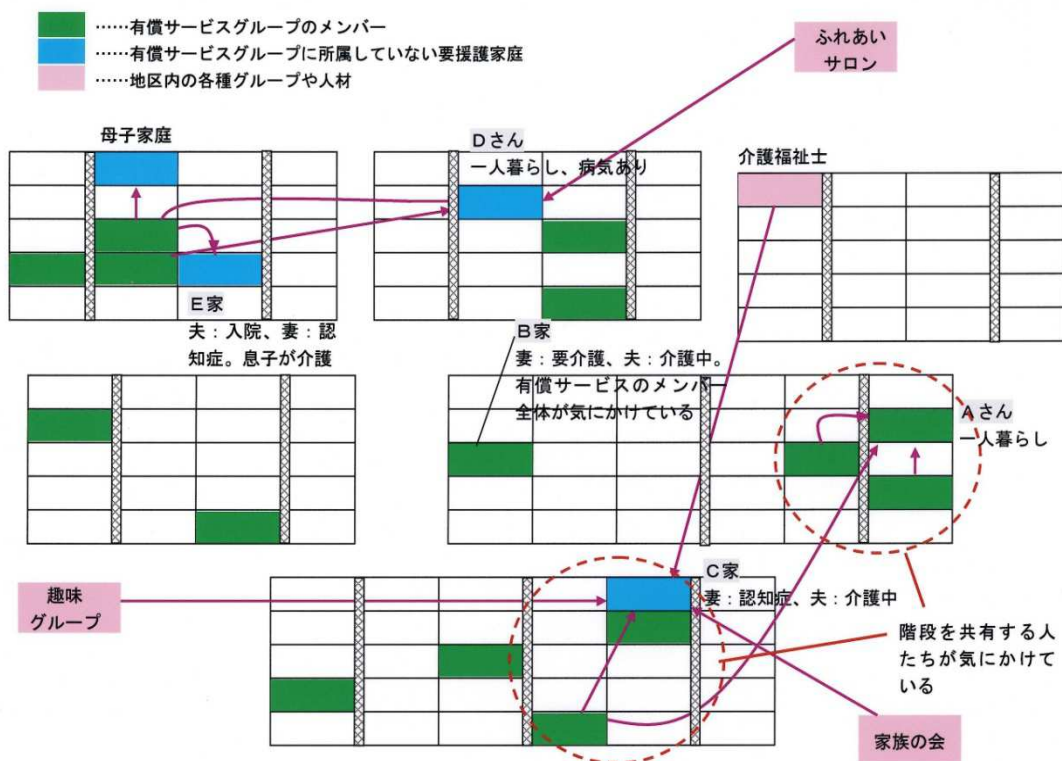
況も分からないし、全く関わり合いがないのだから、助け合いようもない。ならば同じご近所に住むメンバーなら助け合ってもいいはずだ。

②福祉活動グループがご近所でも活動

下のマップは習志野市のある団地で調べたものである。この地区には有償サービスグループがあるが、団地内にもメンバーがかなりいた。彼女らが日常的に助け合っていたのだ。

緑色がメンバー宅だが、例えば一人暮らしのAさんを、同じ棟の2人が見守ったり面倒を見ている。B家は夫（グループのメンバー）が要介護の妻を介護しているが、それをこのあたりのメンバー全員で支援している。C家はメンバーではないが、同じ棟のグループのメンバーが支えている。左上の棟のグループメンバーは、同じ棟の3家族の面倒を見ている。

グループがご近所内に戻ってから助け合い、その輪に他の人も迎え入れることで、かなりの福祉が実現してしまうことがわかるだろう。



地域のグループは校区や自治区だけでの活動でなく、ご近所に戻っても活動するというあり方に変えていったらどうか。

③自治区の活動家はご近所へ戻って活動を

自治区で求められているのは、一つにはご近所の助け合い活動のバックアップであり、次いで難問については上層圏域の関係者に繋げること、そしてもう一つは自治区で活動している人たちが、各自自分のご近所に戻って、ご近所活動に参加することである。有力な人がご近所を出払って、自治区で活躍するから、ご近所力はそれだけ弱ってしまっている。

彼らは今、自治区で福祉活動をしているが、そこにはご近所の当事者は行きにくい。老人クラブも自治区を中心に活動しているが、そこには要援護のメンバーは行けない。ならばご近所に戻って、そこで活動してもらった方が、要援護者は助かるのだ。

(4)各グループが要援護者と担い手の双方を取り込む

超高齢化社会になって、どの地域組織も仲間に要援護者を抱えることになった。認知症も増え続けており、どのグループにも認知症の仲間が生まれる可能性が出てきて、彼等を仲間に入れなければならなくなっている。それが夫々のグループの社会的な責務でもある。

としたら、それらのグループが同時に福祉資源を仲間に取り込めばいい。つまり地域グループが内部に対象者と担い手の双方を取り込むという構図である。複合型グループとすることができる。

①例えば老人クラブが複合型組織になった時

埼玉県川口市の老人クラブとマップづくりをしていたら、新しい発見があった。図をご覧ください。老人クラブの構成員がバウムクーヘンのようになっている。

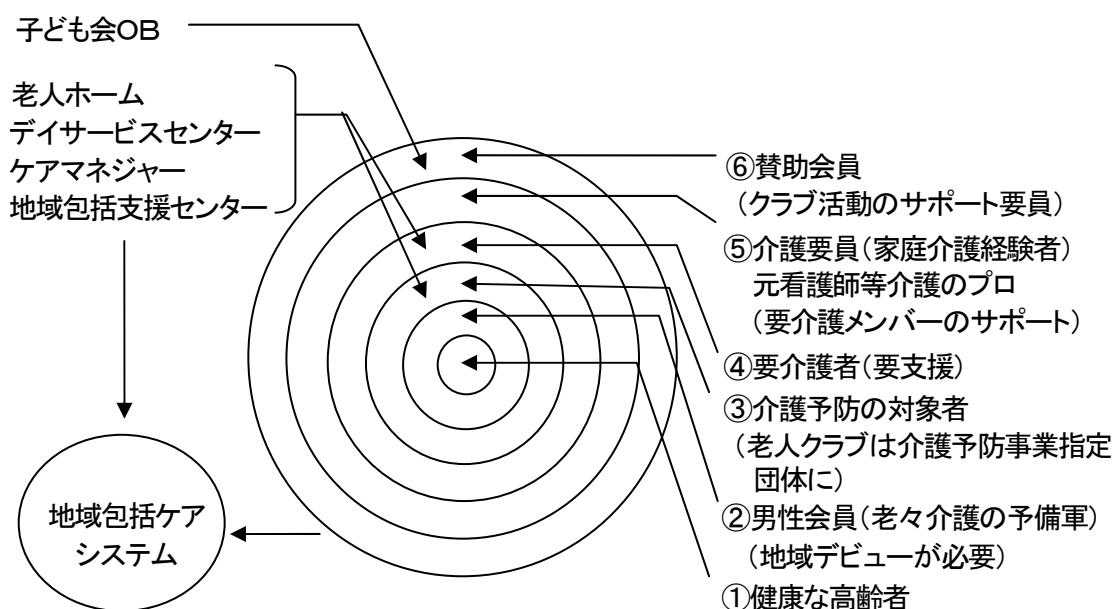
❶いちばん芯の部分は健康な高齢者とする。

②その次が男性会員。老老介護になると、妻を介護するにしても、妻に介護されるにしても、要援護の状態になる。介護支援の予備軍と言える。今から老人クラブに加入することで地域デビューが図られて、「介護殺人」を未然に防止できる。

③介護予防の対象者。会員の少なからずがこれに該当する。老人クラブに加入することが事実上の介護予防になるのだ。

④その次が要介護の人。今の老人クラブはこの人たちを仲間にする気はあまりないようだが、マップづくりをしたクラブでは、積極的に要介護者を受け入れている。

⑤ここからが福祉資源。要援護の会員をサポートする役割の人たち。まずは介護経験者や介護のプロ。このクラブでも調べたら、家庭介護をした経験のある人や、



元看護師などが混じっていることがわかった。

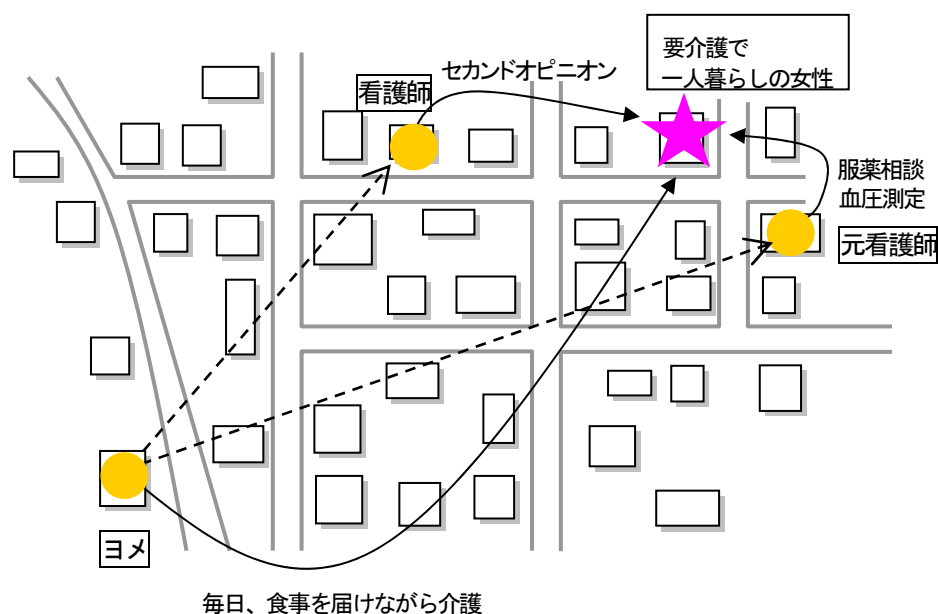
⑥要援護の会員のサポートや、クラブの運営自体を支援する人材。このクラブでは、地元の子ども会（育成会）と繋がっていて、彼らがクラブのイベントなどの時に馳せ参じてくれる。彼らは子どもが子ども会の会員でなくなると、行き場がなくなる。活動の場がほしい彼らと、人材が欲しい老人クラブの利害が一致したということだ。

(5)ご近所に住む保健福祉のプロを生かせ

①介護保険以降、保健福祉の人材がご近所にも急増

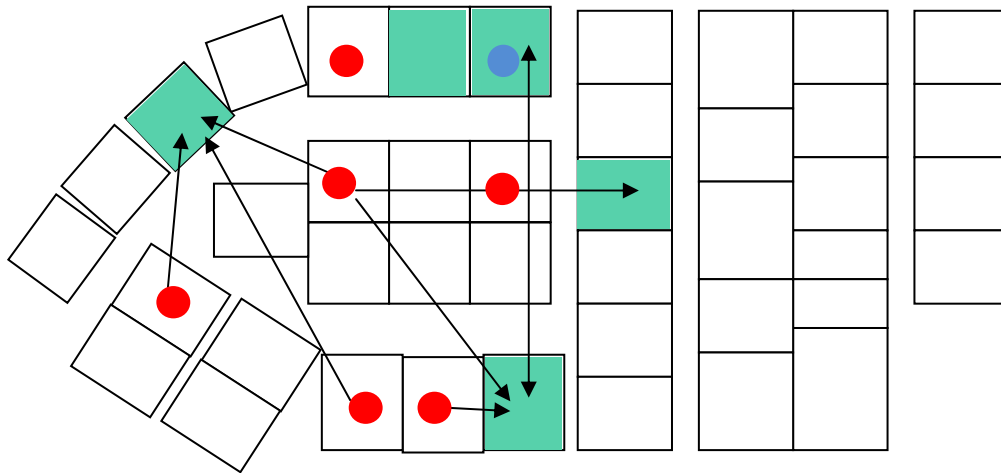
ご近所にはいろいろな人が住んでいるが、その中に保健福祉の関係者もいる。過疎地へ行くと、ご近所はかなり多くの保健福祉関係者がいることがわかる。その人たちが、業務だけでなく、足元の福祉課題にも個人的に対応してくれれば、ものすごい資源になるはずだ。

支え合いマップでよく見つけるのが、保健師や看護師のOBの活躍だ。足元に診療所がない地区では、住民が健康や医療の相談に行っている。あるご近所では2人の看護師（一人はOB）がいた。要介護で一人暮らしの母親を抱えた嫁が彼女のもとに相談に行っていたが、一人だけの相談では心もとないと、もう一人の看護師にも相談を持ちかけていた。「セカンドオピニオンよ」と。



②家庭介護経験者がご近所ごとに数名いる

次のマップでも、青印の人が元看護師で、周りの人が数名、相談に押しかけていた。それだけではない。今家庭介護をしている人は5名いるが、周りの人がサポートに入っている。それが赤印の人だが、この人たちは動意薄上の人かと調べたら、過去に家庭介護を実践していた人たちだった。



■ …介護中の家庭(線は関わる人)。介護経験者●がサポートしている。
●は元看護師。

左端の人には3人が、一番下の人にも3人が入っている。

各地でのマップ作りで、家庭介護者を探すと、一つのご近所に6, 7名は必ずいることがわかった。そして元看護師が1人か2人はいる。だから工夫をすればご近所で介護も担えるのだ。

(6)ご近所内の福祉ニーズと資源を結びつける

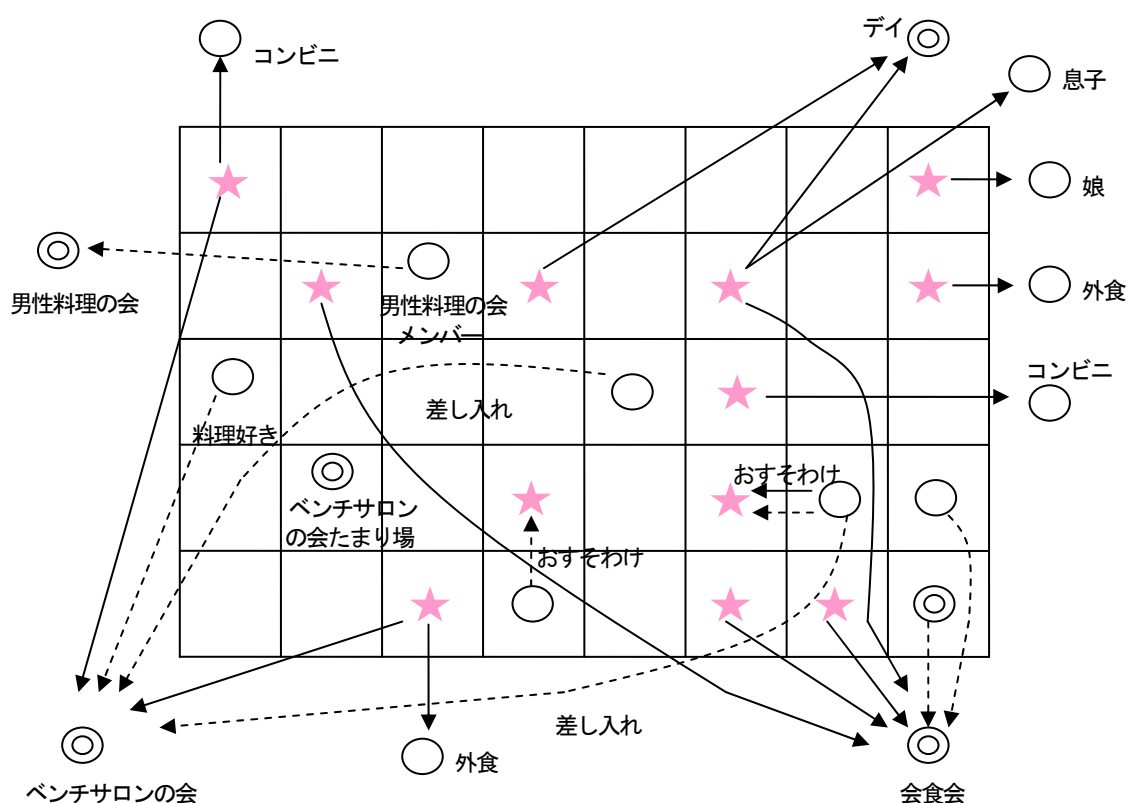
首都圏のある団地。その中の1棟40世帯について支え合いマップを作ってみた。そこで見えてきたのは…

浮かび上がってきたのは、コンビニ弁当や外食頼りの一人暮らし男性。こんな「乏しい食生活」問題を抱えている男性が5人いた。会食会に参加したり、周囲からおすそ分けをしてもらっている女性も加えると「食事ニーズ」を抱えている人がこの棟に9人もいたのだ。

彼等は普段、「食事」の問題をどのように解決しようとしているのか—外食やコンビニ弁当頼りになっているのが一人暮らし男性。ボランティアが主催する会食会に参加していない人もいる。ご近所から日常的におすそわけをもらっている人、井戸端会議で「差し入れ」を食べている人、定期的に子どもの家に食べに行く人、デイサービスに行く（食事が目的の1つ）人など様々だ。

一方で、この団地内に「食事」関連のさまざまな資源が存在していることが分かる。隣人に「おすそわけ」をしている人、井戸端会議に「差し入れ」をしている人、「男性料理の会」のメンバーもいる。料理好きもいる。会食会を開いている人もいる。

どうせ会食会を開くのなら、このご近所内で開けばいいことではないのか。すでに井戸端会議が数か所で開かれている。ならばその「会議」を事実上の会食会にしてしまえばいいことだ。人材も「ボランティア」を集めるまでもなく、それらの井戸端会議に「差し入れ」をする人がいるし、料理が得意な人も数名いる。「男性料理の会」のメンバーも。それらの人材をこの団地内の食事ニーズに対応するために結集すればいいのだ。そうした人材を数えてみたら10名もいた。

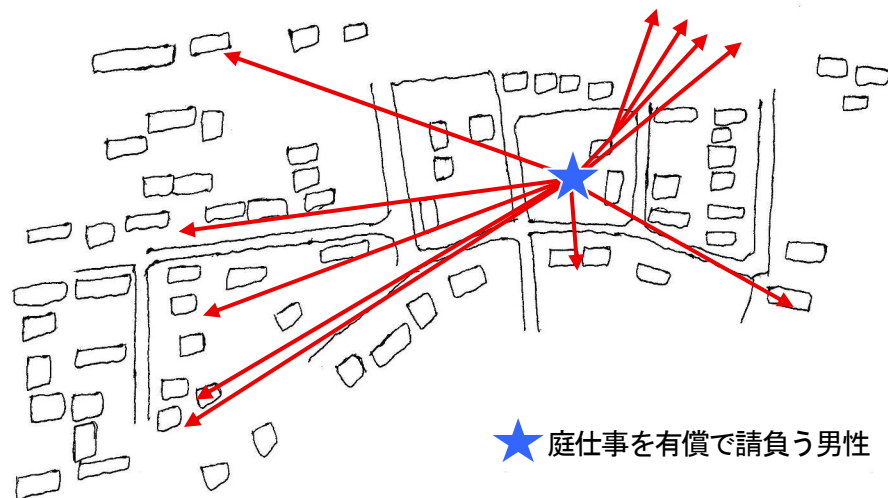


このように、テーマごとにご近所内の要援護者と担い手を、徹底的に掘り起し、それらを効率よく結び付ければ、何とか対応できるのではないか。

(7)ご近所活動で「有償」も使いこなす

①自然発生的な有償活動も

住民は助け合いの中で巧みに有償制も利用している。助け合いと言え、あまり「お金」の絡む行為は馴染まないように見えるが、これも使いようで生きるのだ。ただ、関係者の生かし方とちょっとだけ異なっている。



上のマップ。企業を退職した男性が、生きがいにと庭木の剪定技術を習得した。すると近くの高齢者が「うちの庭をお願い」と頼みに来た。それを知った他の高齢者が「うちも…」と来て、とうとう11軒の庭木の剪定を請け負うことになった。

お礼はどうなのか。一定の料金設定はしていない。彼は価格を決める気はなく、無償でも構わないと言っている。したがって依頼主の判断や両者の人間関係によって千差万別のお礼形態となった。それで不都合が生じないのが、いかにも住民らしい。

②組ごとに有償サービス。足りない資源は他の組と調整

有償サービスは市町村全域を対象として活動しているのが一般的である。ではこの有償活動をご近所単位に実施したらどうなるか。兵庫県赤穂市でこの試みが始まった。

一応、推進者は自治会。その1つ、「塩屋東」自治会（600世帯）を例にとると…正確には「パートナーサービス」（小地域の日常生活支援サービス）と言うが、

これを自治会として実施することに。各組長（19組ある）を主体の世話役会を設けてスタート。その後、公募で集まった協力会員も含めて、「世話役会」をつくり、毎月定例会を開いて、活動のすすめ方などを協議している。

住民からの活動要請はどのように上がってくるのか。この部分は組単位だ。各組の協力会員（組長含め）の代表（1人または複数）に組内の利用会員がやってきて、協議の上、協力者を派遣。自分の組では対応できない場合は、他の組の人材にお願いする。自治会圏域でやることは定例会開催や組間の調整で、有償サービスのやりとりは各組、つまりご近所で行われている。

ご近所単位だと、申請の上がり方も、その中味も、有償に馴染むものと、隣人同士の助け合いがいいものが入り混じっている。したがって、無償と有償を、お互いのおつき合いの関係も含めて、その時々で柔軟に判断していく。有償という制度をきっかけにそういう細かなニーズもついでに上がってくるのがメリットだと言える。

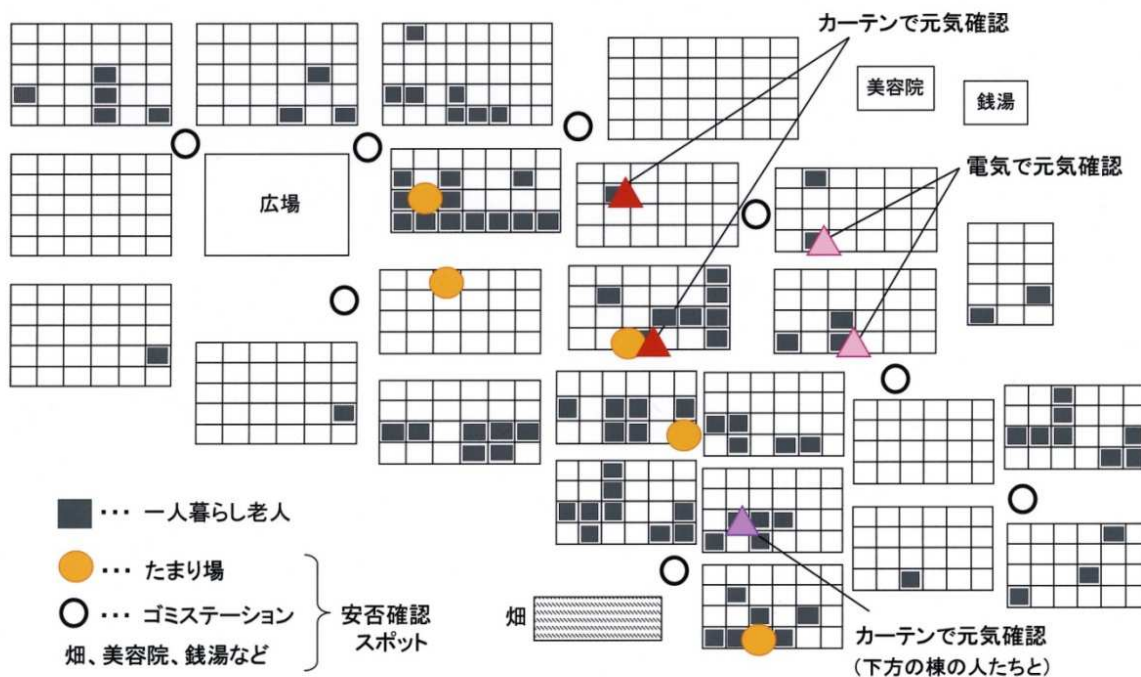
(8)当事者同士の助け合いを応援

マップを作っていて、一人暮らしの高齢者が数軒固まって生活しているのを発見するが、その場合、必ずと言っていいほど彼女らは助け合っている。

当事者グループは市町村単位に作られるのが通例だが、この圏域では助け合いはやりにくい。ご近所単位のグループなら、普段の生活の中で愚痴を言い合ったりはできるのだ。

次のマップは、福井県のある古い県営住宅で、黒い印はすべて一人暮らしの家。地元の機関は、多数の見守りボランティアを養成しなくてはと嘆いていたが、じつはそんな必要はなかった。

彼女らを10数名、招いて調べてみたら、ボランティアが必要ないほどに彼女らで助け合っていた。お向かい同士で「カーテンがあいていたら元気」「夜天気がついていたら元気」とか。彼女らの安否確認スポットはこんなにたくさんあった。加えてリーダーたちが手分けして、自転車と電話で「訪問」していた。



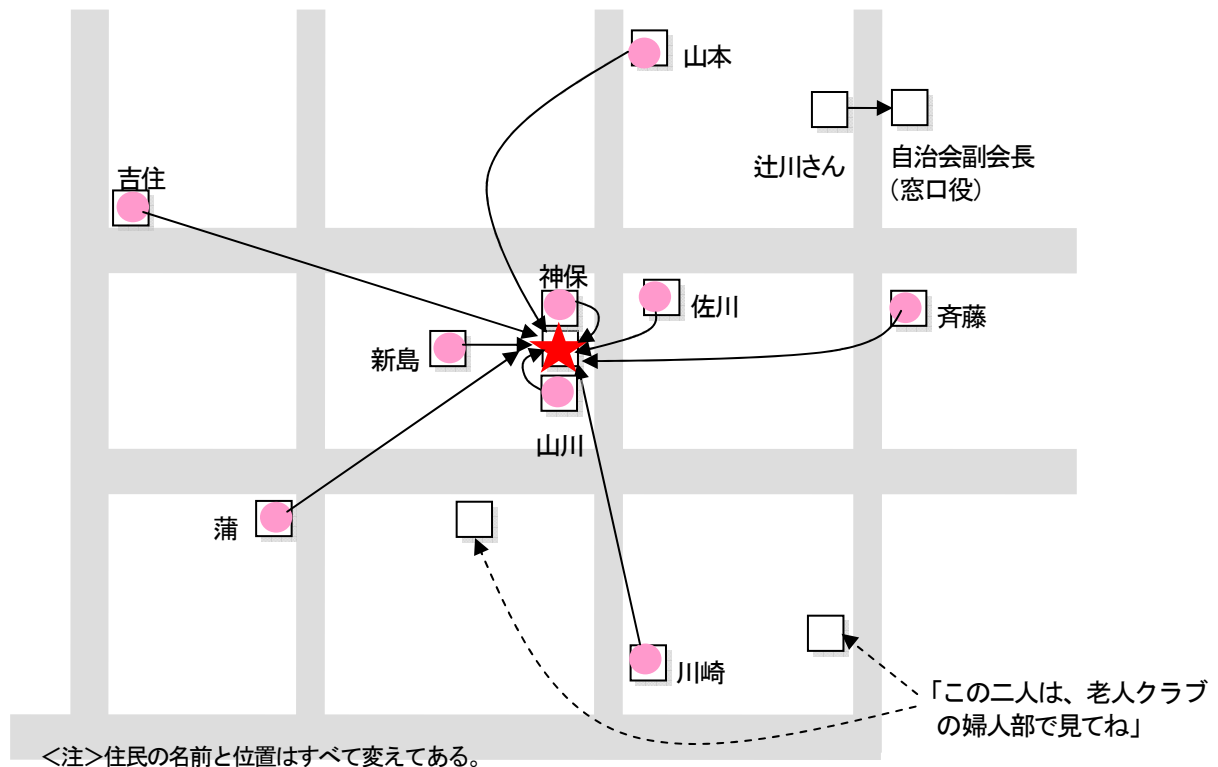
(9)気になる要介護者にはプロと役割分担

国民が介護保険制度を過度に利用しているために制度が崩壊の危機に瀕している。やむをえずサービス対象を絞り込んでおり、そのために地域には「気になる要介護者」が急増している。サービスから外されたこの人たちを住民が救わねばならない。どうしたらいいのか。

①ご近所で住民たちが「ケア会議」

奈良県田原本町（長寿介護課）が養成していた「地域支援員」、町内圏域にしながら、各ご近所内での助け合い活動を仕掛けていくという役割だが、その中の辻川勝代さんと蒲俊子さんの2人は、ご近所圏で住民によるケア会議を開きながら、住民の手の負えない重篤なケースについては関係機関と一緒に関わる、という試みに取り組んでいた。

2人は130世帯の町内から、協力者と要支援者を募集。5人が手を挙げた。月一回、老人会の幹部、民生委員、協力者で「ケア会議」を開き、各自の支援活動の報告や、要支援者の情報を出し合った。



②ケアマネのケアプランと住民の支援プランを合体

その後、協力者の一人が関わっていた対象（★印）が深刻な状態に。夫96歳、妻93歳、息子60代の3人の世帯。最近、妻が入院。息子は働いていて、昼間は96歳の父一人。ケアマネがケアプランを立て、それと息子の1週間の予定表を基に、2人が別添のローテーション表を作成することに。これには①ヘルパーが入る日、②デイサービスの日、③住民が入る日、④息子さんの担当部分等が記載されている。

住民が担うのは、給食の受け取りと配膳、飲み薬のチェック、デイサービスの見送りと出迎え、クーラーの調整。これとは別に、近隣の協力者やそうでない人も含めて、各自自発的に家庭を訪問。その結果を当事者宅に置いてある「連絡ノート」に記入することになっている。

辻川さんが毎月作成している「ローテーション表」を見ると、例えば

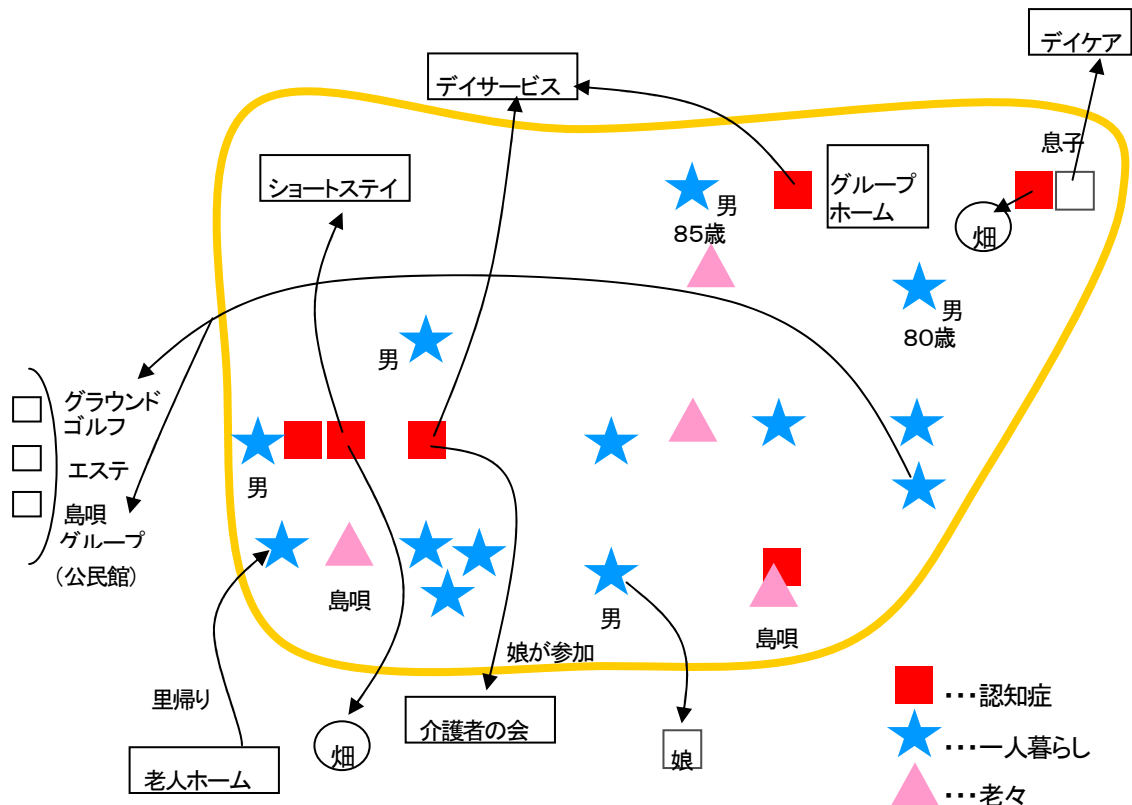
○月△日（金）	昼・ヘルパー。	夕方・支援（住民の担当）
○月×日（土）	昼・息子。	夕方・ヘルパー

のように、住民と関係者が完全に一体となって実行されていることが分かる。

(10)法人が連携してご近所を支援

①対象者を囲い込むだけでいいのか？

介護保険制度ができて以来、地域にはたくさんの福祉事業所や福祉施設ができた。一つのご近所圏域でマップを作ると、その内外に複数の施設などが見つかる。



上の図を見ていただきたい。このご近所内には認知症対応のグループホームがある。一方で、ご近所内には多数の認知症の人がいて、老々や一人暮らしの人も居る。実情を調べると、かなり心配である。おかしな光景とは思われないか。せめてこのご近所内の数名だけでも、たまに様子を見るとか、ご近所の人と情報交換したり、一緒に関わることはできないのか。

②ご近所と関係した事業所等でご近所支援体制を

最近社会福祉法人の社会貢献が求められるようになった。当然の成り行きである。

グループホームだけでなく、このご近所と関わっている機関・施設は、御覧のようにデイサービス、ショートステイ、老人ホームなどがある。ただ対象者をご近所から引き抜いて、囲い込み、サービスを提供するだけでなく、できればご近所内で自分らしく生きていけるように、連携して支援すべきではないか。

考えてみれば、このご近所の自主的な福祉活動を支援できるのは事実上、彼等だけなのだ。

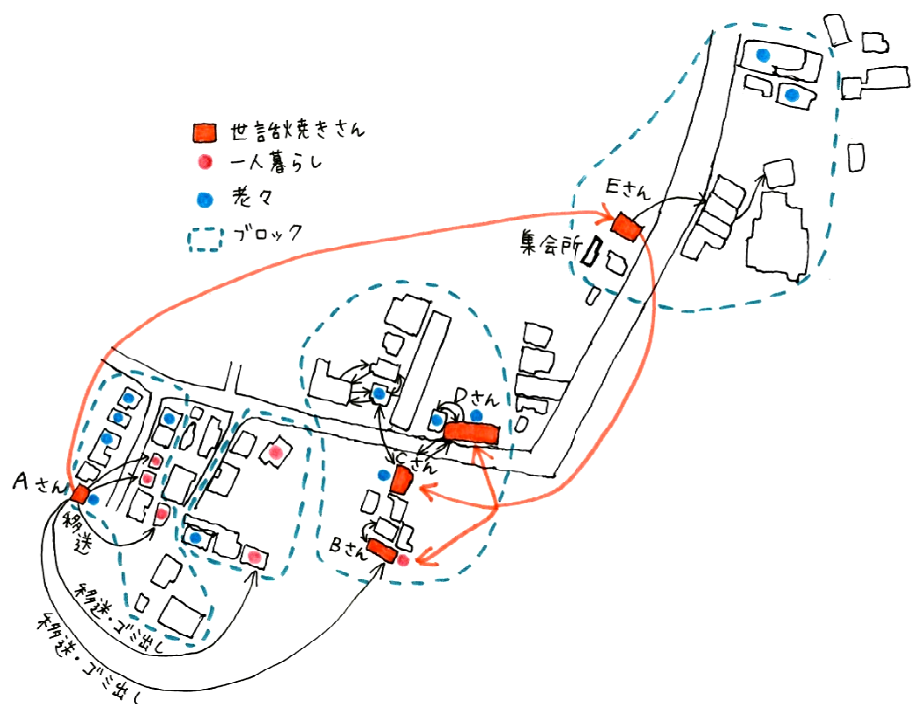
(11)世話焼きでご近所福祉推進体制

ご近所福祉がなかなか強まらない、おそらく最大の理由は、ご近所福祉を責任を持って推進する体制ができていないことであろう。世話焼きさんたちがそれぞれ自主的に要援護者の面倒を見ているが、それも遠慮がちにである。やり過ぎると「でしゃばり」の聲が飛ぶ。これでは仕方がない。

民生委員もこの世話焼きさんたちを情報屋として重宝しているが、「あなたたちでご近所福祉はやってね」という言い方はしない。それは民生委員である私の領分だというのだ。そろそろ自分は司令塔の位置に下がって、世話焼きさんたちを前面に押し出すべきである。

右のマップでは、最下段の世話焼き・Aさんが全体を仕切っており、さらに小ご近所毎に責任を持ってもらう中型世話焼きと連携している。

毎日、中型世話焼きを巡回して、何かあった？と聞いて回っている。こういう構図ができれば、ご近所福祉はかなり強化されるはずである。



(12)ご近所づき合い革命

先ほど述べたように、世話焼きさんが活躍しにくい風土が日本にはある。活動を始めると「でしゃばり」といわれる。日本人のおつき合いには助け合いを阻む要因がいろいろある。これを取り除かねばならない。

①あなたのおつき合いの流儀は？

まず自分のおつき合いの流儀を確認するテストをやってみてほしい。以下の項目で「私もそう思う」というものに○印を、「そうは思わない」に×印をつける。ここでは○か×かのどちらかに決めていただきたい。さて、あなたは○がいくつ、ついたか。

①自分や自分の家族のことは隠しておきたい	<input type="checkbox"/>
②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ	<input type="checkbox"/>
③人に助けを求めるのは苦手だ	<input type="checkbox"/>
④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない	<input type="checkbox"/>
⑤人のことはなるべく詮索 <small>せんさく</small> しないようにしている	<input type="checkbox"/>
⑥誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている	<input type="checkbox"/>
⑦困っている人にはお節介と言われたい程度に関わる	<input type="checkbox"/>
⑧引きこもるのにも事情があるから、無理にこじあけるべきでない	<input type="checkbox"/>
⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う	<input type="checkbox"/>
⑩隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている	<input type="checkbox"/>

②助け合いをしない前提のおつき合いだった

冒頭のテスト。各地での講演会で手を上げてもらおうと、多くの人が10個のうち7つから9つほどに○が付く。それもそのはず、これらは日本人のおつき合いの常識なのだから。しかしこれでは助け合いはできない。○印が多い人は、「助け合いはしたくない」と言っているのと同じなのだ。日本人のおつき合いは、助け合いを

しない前提で成り立っているのだ。

この10の流儀がご近所の世界を支配している間は、ご近所福祉は進展するはずがない。これらを変えていくことが、ご近所で助け合いが始まるための絶対条件になるのだ。

①あなたが助けられる立場になった時 (①~④)

10項目を「助け合い」の観点から3つに分けて考えてみよう。まず「助けられる側」から見ると、以下の4項目が該当する。これに○がつけば、どうなるのか、→印で示してある。要するに「私のことは放っておいて」と言っているのだ。周りも助けの手を出せない。

①自分や自分の家族のことは隠しておきたい

→人の困り事が周りに気づかれない。

②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ

→困り事の情報周りに伝わらない。

③人に助けを求めるのは苦手だ

→「頼まれたら助ける」のが日本人。これでは手が出せない。

④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない

→迷惑をかけたくないと思えば「助けて！」とは言えなくなる。

②あなたが助ける立場になった時 (⑤~⑧)

今度は「助ける側」から見よう。関連しているのは4項目。

⑤人のことはなるべく詮索しないようにしている

→詮索するほどの積極性がないと、人々の困り事は見えない。

⑥誰かが認知症と気付いても、だれにも言わないようにしている

→それでは困り事の情報周りに伝わらない。

⑦困っている人には、お節介と言われないう程度に関わる

→そんなに消極的な姿勢では、人は助けられない。

⑧引きこもるのにも事情があるから無理にこじ開けるべきではない

→だから、孤立死が生まれるのだ。

③あなたのご近所づき合いの流儀は？（⑨～⑩）

最後は、私たちのご近所づき合いのあり方です。

⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う

→「あなたのことは放っておきます（助けない）」ということ

⑩隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている

→困り事は言い合わない、つまり助け合いをしないご近所関係

③助け合いができる新しい常識を作っていこう

助け合いはきれいごとではないと思知るべきである。本当に助け合いたいのなら、助けられる側、助ける側の双方が、受け身の姿勢から攻勢に出ること。

助けてもらうには、隠したいことをオープンにしなければならない。周りも、その人のプライバシーに踏み込み、家庭の内情を聞き出し、強引に関与していかねば、助けられない。助け合いをめざすための新しいおつき合いのあり方を「おつき合い憲章」として掲げてみたらどうか。

- (1)わが家の問題を周りに打ち明けよう。
- (2)自分のことを敢えて噂話のタネにしてもらおう。
- (3)困ったら、思い切って「助けて！」と叫ぼう。
- (4)助けてもらうために、迷惑かけ上手になろう。
- (5)人助けをしたければ、詮索の鬼になれ。
- (6)「口が堅い」のも、よしあしだ。
- (7)お節介こそが、本当の思いやり。
- (8)引きこもりの人を救いたければ、こじあけよう。
- (9)プライバシーを尊重しては、相手を助けられない。
- (10)助け合いたいのなら、お互いの家をひらき合おう。

9.圏域ごとの推進体制づくり

それぞれの圏域に与えられた役割を果たすには、しっかりした推進体制を作っていかなければならない。その場合に留意すべきことは？

(1)福祉推進体制づくりの留意点

①まずご近所から体制づくり

今の地域福祉では、ほとんど第1層の体制づくりから始める。地域の福祉・保健関連機関や地域住民の各層からの代表者で協議会等を作るが、これがどれほど機能しているか。ご近所からどんな問題が上がってくるのかを考えず、参加者（組織）の資源力としての評価をせず、はじめに体制づくりありきで進めてしまっているため、機能する場合がむしろ少なくなっている。

福祉問題はご近所から発生する。それに対してまずご近所でそれらに対応するための体制を作るのが先決であって、上層の体制づくりはその後の問題なのだ。

②天性の資質のある世話焼きさんを主体に編成

通常は公的機関や住民組織が委嘱したり、養成したり、あるいは順送りで選出された人たち（自治会長とか班長、福祉委員）などで体制を作るが、福祉はこれで対処できるほど甘いものではない。福祉問題を解決させるのが至上命令なのだから、その資質のある人で編成しなければならない。これを受け入れることができないために、地域福祉はほとんど進展しない。

③支え合いマップづくりで人材発掘

本当に今、機能している人材を探し出すには、支え合いマップづくりをする以外にない。ご近所ごとに誰が誰を支援しているかを調べる中で、大中小の世話焼きさんがきれいに浮かび上がってくる。本冊子に紹介したマップのほとんどで、世話焼きさんが存在することが分かるだろう。

④資源として機能している人材・組織に絞る

支え合いマップで点検していくと、住民組織や関係機関のスタッフの中でも、その資質のある人かどうかもわかってくる。組織にしても、機能している組織とそうでない組織の区分けもできる。そこから使える人材、使える組織を選べばいい。

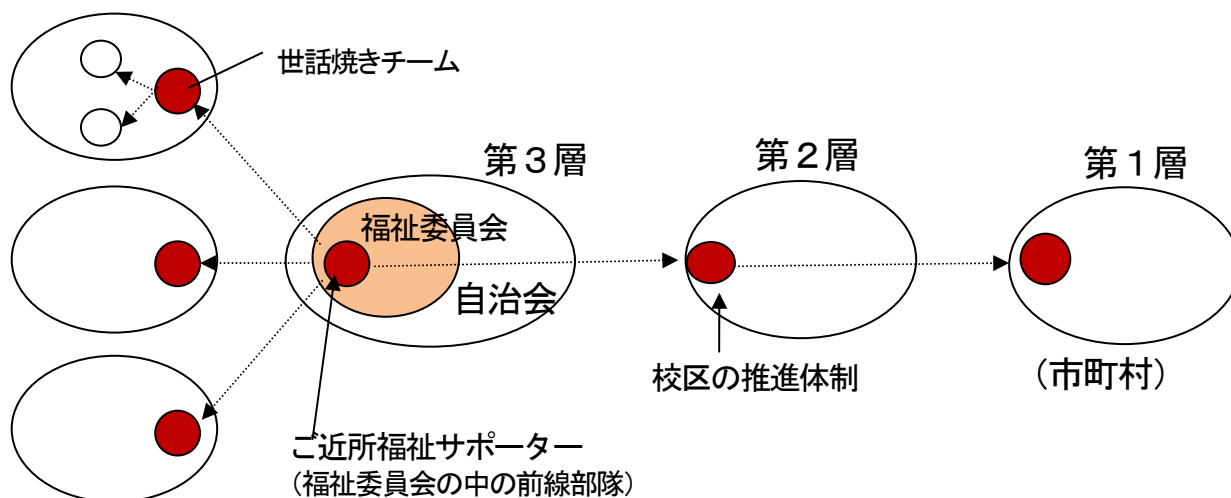
⑤人数を揃えるよりも、有力人材による少数精鋭で

体制を作るために、その資質は無視して、地域内の主だった組織から派遣してもらったりするが、それで機能しなければ仕方がない。それよりも、人数は少なくとも、世話焼きの資質のある人が少数で進め方がうまくいく。ご近所程度の規模なら、大型世話焼きさんが一人いれば足りてしまうということもある。

⑥下層の人材たちで上層を担うという手も

地域福祉を効果的に進めるために必要とする人材は、意外に少ないというのが現状だ。ご近所の規模なら数名の世話焼きさんがいることは間違いないが、それ以上の層の人材を発掘するのが極めて難しい。数百世帯を視野に収められる超大型世話焼きさんは、ごくごく少ない。それ以上の校区あたりの業務を担える人材は、ほとんどゼロに等しい。ならばどうするかと言えば、下層の人たちで上層の推進体制を作るという苦肉の策である。各ご近所の世話焼きさんで自治区圏域のご近所支援体制を作る。自治区の大型世話焼きさんたちで校区の推進体制を作る、というように。

(2)各層の推進体制づくり



ご近所圏域

①大中小の世話焼き軍団で「ご近所福祉推進チーム」

支え合いマップづくりをすれば、大中小世話焼きさんが数名発見できるから、この人たちでチームを作り、ご近所福祉を推進してもらえばいい。

自治区圏域

②ご近所福祉サポーターが「ご近所福祉推進チーム」をサポート

ご近所福祉推進チームは、まだ自覚的に活動する心の準備ができていない。世話焼きだから、周りの人の世話を焼いているが、自分がそんな出しゃばったことをしているのかと思っている。そこでチームを後ろからバックアップして、「あなたたちでやっていいのですよ」と励ましてあげる人材が欠かせない。それが（第3層の自治区に居る）ご近所福祉サポーターである。民生委員がちょうどピッタリの位置にいるが、これにも向き不向きがある。サポーターが日常的にご近所を巡回して世話焼きの活動を支援する。

③「サポーター」を支える自治区の支援体制づくり

自治区の推進体制とは、実質はご近所へのサポート体制である。自治会組織自体、

福祉を主たる目的としていないので、福祉機能はあまり果たしていない。そこで自治会の中に福祉委員会を設けるケースが多い。福祉に関わる人材や組織で構成する。

しかしこれも現実には機能しにくい。機能する組織にするには、そのメンバーが福祉を本気で担う気がなければならない。ではどうするか。

その委員会のメンバーに、世話焼きさんの資質のある人が混じっていて、個人的にご近所まで出かけて、世話焼きを支援したりしている。前線部隊と命名して、組織の縛りを受けずに自由に行動してもらったらどうか。その中心人物がご近所福祉サポーターと考えればいい。

④自治区には活動・人材を「ご近所に戻す」機能も

ご近所でできないものを自治区に上げるのもいいが、なるべく自治区でやらないということも大切だ。活動をご近所へ下ろすのである。

自治会長は、特に熱心な人ほど、自治区の圏域でやってしまおうとする。ふれあいサロンや会食会、移送サービス、世代交流、敬老会など。しかしこの中にはご近所に下ろした方がいいものもある。自治区で実施すれば、ご近所にいる要援護者が参加できない。だからご近所でやれるようにバックアップする方がいい。

自治区圏域で活躍している人に、自分のご近所圏域で活動してもらうことも大切だ。それでご近所福祉が充実してくる。認知症サポーターや食生活改善推進員、保健推進員等も、ご近所でその資質のある人を選出した方がいい。

⑤自治区の活動家はご近所へ帰れ！

自治区の推進体制を強化することよりも、ご近所活動を支援することを強化すべきである。だから、自治区に結集して支援体制を作るのなら、むしろ各自が自分のご近所に帰って、そこでご近所福祉を強化することに力を入れてもらった方がいいのだ。

校区圏域

⑥校区の体制は自治区の優秀な人材で固めるという法も

自治区からご近所までは容易に足を運べる。特に民生委員はこれをしている。やはり福祉を中心的に担うには、「ご近所に足を運べる範囲」の人でないといけない。そこに要援護者がいるのだから。

そこで考えられるのが、自治区の前線部隊、特にご近所福祉サポーターたちで校区の体制を固める方法だ。大抵は民生委員だが、現に校区の推進体制の主流に居る。

ご近所サポーターとして担えない部分を校区の推進人材として担っていく。こうすることで、ご近所から自治区、校区の全体を通して、末端の要援護者の声が聞き届けられる体制になるのだ。

⑦校区からご近所へお出かけ。「モデルご近所」を指定したら？

問題は、民生委員が校区のキーマンとして活動を始めると、ご近所への関心が薄れてしまうことだ。必要なのは、ご近所からずっと離れた所で議論をするのではなく、校区からご近所まで出かけて、そこで校区の役割を考えることである。

手っ取り早く言えば、ご近所に行って、ご近所さんと一緒にマップづくりをすればいい。そこから校区の役割も出てくるから、それを持ち帰ればよい。そういう作業を日常的にできるようにするために「モデルご近所」を指定してもいい。

⑧校区や市町村圏域でも前線（精鋭）部隊づくり

推進体制を作る際に、前線（精鋭）部隊を作ることが提案してきた。これを校区や市町村圏域でも作ればいい。何十もの出身母体から集まった集団では機能しない。その一部有志が独断で進めることで、効率よく事業が行われているのは間違いない。

⑨校区に期待される高度な役割

自治区は、ご近所福祉のサポートに徹して、活動体制づくりにあまり力を入れるべきではない。それよりご近所に帰ってご近所福祉の推進チームに加わるべきなのだ。一方で校区にはかなり高度な役割が期待されている。ここではもはやご近所からは遠く離れているので、直接ご近所に関わることはできない。そこでご近所や自治区ではできない高度な役割をこの圏域では果たしてもらわねばならない。

①ご近所福祉推進体制、ご近所支援体制づくりの指導

地域福祉が実際に展開される現場はまずもってフォワードたるご近所である。だがその力はまだ弱い。これを強固なものにするための直接の支援はミッドフィルダーの役割だが、ご近所福祉推進体制作りの一般的なあり方を確立していくのは地区の役割になる。当然、ミッドフィルダーをだれが担って、どういう役割をしてもらうのか、その人材育成も併せて考える必要がある。

②時代が求める新しい福祉課題を、取り組み方も含めて下層へ伝える

地域の人たちはいつも福祉のことを考えている訳ではないし、そのトレンドを把握してもいない。それを地区でしっかり把握して、下層に伝えていかねばならない。講座とか資料とか伝える方法はいろいろだ。

③具体的な福祉活動のやり方を考え出し、マニュアル化して住民に指導

頭脳労働そのものであるが、そういう人材を地区から集めて、継続的にこのような作業ができる体制を作るといい。ご近所で行われている活動をキャッチして、それをマニュアル化して、他のご近所に伝えるというのが、最も一般的なやり方だ。

④福祉ニーズへの対応で、高度の資源または広域資源が必要とするものに対応

ご近所や自治区ではとても手に入らない人材や資源を調達する。例えば見守りの資源として、ガス会社などに話をもち込むのは地区の役割だろう。施設に入所した人の里帰りを実現したいといっても、ご近所の人では手に負えないが、施設が所在する地区の関係者が施設と交渉するという手がある。通院の問題で、病院側の協力を求めたい時も、ご近所よりも地区の方が交渉しやすい。

⑤住民各層の本来担うべき役割を提示

地区社協の特徴は地区内の様々な組織が一堂に会しているということだろう。そこで求められるのは、福祉のまちづくりでそれぞれの組織が本来どういう役割を果たすべきかを確認し合い、お互いに徹底させることである。

例えば老人クラブは何が問題なのか。会員減に悩んでいるというけれども、彼らの最大の問題は、要援護者を仲間に加えないということではないか。同じようにして、ふれあいサロンや趣味グループも要援護者を仲間に入れる気はあまりない。子ども会も同様で、障害児を仲間に入れているだろうか。

これらの課題が解決されれば、それだけで大変な福祉を実行したことになるのだ。

もう一つは、今実施されている事業は本来どの圏域でなされるべきかを見分け、その圏域に指示していくのも地区の役割だ。そのためにまず地区が率先してこの仕分けをやらねばならない。

⑥今特に求められる人材の育成

今求められている人材とはだれか。一つにはご近所福祉を推進する人たち。世話焼きさんたちがいるが、福祉の進め方が分からない。それを教えていく。

あるいはご近所福祉をバックアップするミッドフィルダーの人材養成も必要だ。これらの人たちが育たないことには地区が腕の振るいようがない。

今、子ども食堂や認知症カフェが盛んだが、こういう新しい活動を自治区やご近所に伝え、指導していくのも地区の役割になる。

⑦助け合いのまちづくりへの啓発活動

だれもが助け合える街を作っていくには、まだハードルがある。困った時「助けて」と言えるか。自分の要援護状態をオープンにすることさえできていない。困った人がいても手を出すことをためらう風土もある。これらを克服していくための啓発は、地区の仕事になる。

市町村圏域

①ご近所さんとマップを作れば、市町村の役割も出てくる

ご近所まで出かけて、ご近所さんと一緒にマップを作る中で、市町村の役割が出てくるし、それに対応する中で、その地域らしい推進体制や組織が生まれてくる。

10.ご近所先行のニーズ対応

ニーズに誰がどう対応すべきか。ニーズはご近所から発生する。ご近所に居ればよく見える。ニーズ対応もご近所優先だ。

(1)各層がご近所に結集して役割分担

ニーズ対応と言えば、市町村域で関係者がアンケート調査などでニーズを掘り起し、それに対応したサービスを作り、当事者から申請を受け付けて、そのサービスを提供する—というのが最も一般的なやり方であろう。

ところが、福祉問題はご近所で発生する。なのに関係機関はご近所に出かけもしない。市町村域で勝手にニーズを推測し、サービスを作ってしまう。まずはご近所へ足を運ぶべきである。最低限、自治区のご近所サポーターがご近所へ出かけて、マップづくりをするなりして、ニーズを把握し、それにご近所が取り組むのをバックアップし、難題を上層へ上げていくことだ。

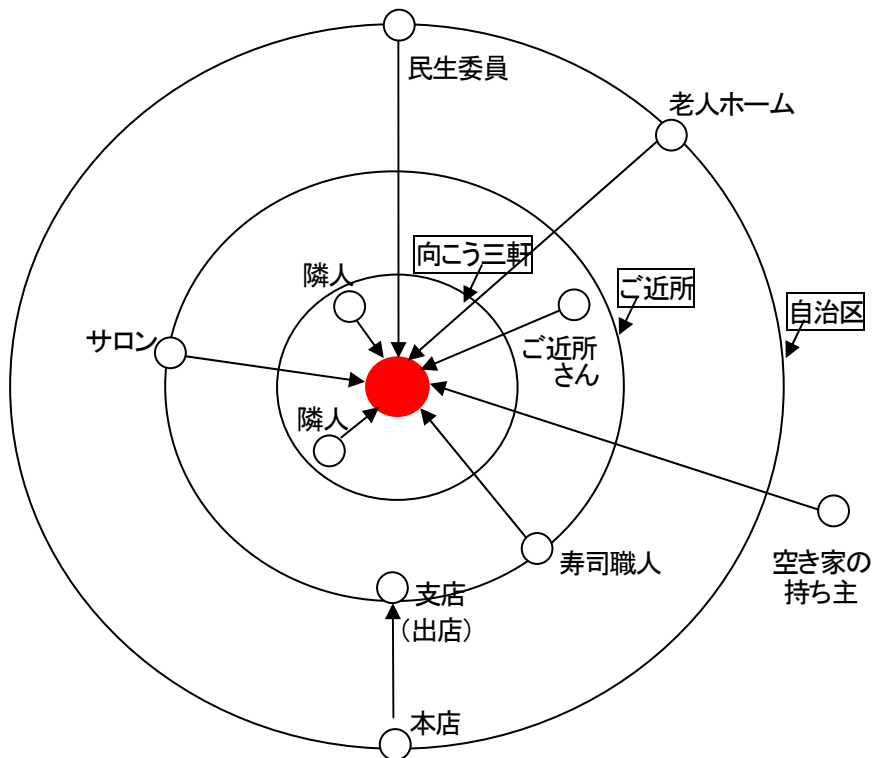
(2)ご近所で発生したのだから、まずご近所で対処

問題はご近所で発生したのだから、まずご近所で対処すべきである。どの問題も何らかの意味でご近所がらみである。だからご近所という場で、ご近所さんの参加で、そこに関係者も馳せ参じて、解決努力をする。これが筋というものなのだ。

図を描いてみよう。あるケースに当てはめてみるが、とりあえず基本構図を説明しておこう（50頁）。●が当事者。一つ目の円が向こう三軒。次がご近所（50世帯）。次が自治区。その外が校区や市町村域。それに、この地区の課題（あとで紹介）に関与すべき人材・組織を載せてみた。彼等があくまでご近所を拠点に、ご近所さんと連携しながら、課題に取り組むのだ。

<課題ごとの層（圏域）別の役割分担表>

課題	向こう三軒	ご近所	自治区	校区・市町村
一人暮らし① 食事の問題	おすそ分け	寿司職人の 活用	民生委員が コーディネート	老人ホームの 食事を開放
一人暮らし② 助け合い	サロンへお誘い。 向う三軒で井戸端 会議	サロンが参加受け 入れ	同上	
店が遠い	みんなで購入	店に協力（商品開 発・提供。販路開 拓）	同上	商工課・商店会が 本店を後押し
引きこもりの人	声かけ	声かけ サロンへ誘う	民生委員が 働きかけ	福祉課が協力
施設入所者 里帰り	里帰りを受け入れ	里帰りに協力。 サロンも受け入れ	老人ホームに働き かけ	老人ホームが支援 （移送等） 空き家の主に働き かけ



ここで事例を示そう。マップを見ながらお読みいただきたい。

①ここは一人暮らし高齢者が多い。一人暮らし同士で助け合うことはできないか。

ご近所全体が老人ホームのようでもある。まずは彼ら同士が助け合えるようにしていかなければならない。中央部に集会所があり、サロンが開かれている。そこに彼らのうちの3人が参加している。この3人から始めたらどうか。

②寿司職人を生かせないか？ 養護老人ホームが給食を地域に開放できないか。

一人暮らし高齢者の中の、特に男性は食生活が貧しい。そこで食生活関連の資源を探したら、ご近所内に寿司職人が住んでいる。その周辺に少なくとも二人の一人暮らしの男性がいる。せめてこの二人だけでも、食事のおすそ分けをしてもらえないか。彼が主導してご近所に食事サービスのグループはできないものか。

近くに養護老人ホームがあって、かなり柔軟な処遇方針を取っているようでもある。ならばご近所の一人暮らしの人たちへの食事サービスもできないだろうか。

③出店してきた店を、さらに拡大できないか。

一人暮らしの多くは女性で、不便していることの一つは買い物だ。うまい具合にご近所内に、他地区から出店して来ている。これをもっと広げたらどうか。品数を増やしたり、注文販売もするとか。

④引きこもりの人に接触を。

周囲の人と交流したがない男性が一人いた。なんとか接触するきっかけはないものかと知恵を絞っていったら、一つ見つかった。民生委員が敬老祝い金の支給の件で訪問したら応答がなかったのだが、「敬老祝い金の件で至急、協議したく」とメモしてドアの隙間に挟んでおいたら、後で電話がかかってきた。そのことなら話し合いに応じるという。突破口が見つかった。

⑥施設入所者が数名。里帰りはできないか。じつは里帰りをしている人がいた。

里帰りをしている人で、ただの里帰りだけでなく、趣味活動のグループに加入したり、他の人の慰問までやっていた。何でこんなことができるのかと聞いてみたら、前述の養護老人ホームに入所していて、その施設がこういうことに理解を示しているらしいと分かった。

しかも施設はここのご近所からそんなに遠くない。ならば他の入所者についても、本人の意思を確認しながら、好きなところへ自由に里帰りできるようにしよう。ふれあいサロンや趣味グループなどへ。

⑥このご近所で「逆デイ」をしたら？

せっかく理解のある施設なのだから、もっと本格的な地域貢献をやらしてもらおう。ご近所の特徴は空き家が多いことであるが、空き家のうまい生かし方がなかなか出てこない。そこでその一つとして、この一軒を整備して、逆デイができないものか。デイサービスと言えば各自、自宅からデイサービスセンターへ行き、夕方には自宅へ戻る。その逆とは、老人ホームで生活をしながら、昼間は地域の家で過ごし、夕方になるとまた施設へ戻るのだ。こうすれば入所者も昼間はご近所で暮らすことができるようになる。この施設から入所した人だけでなく、他の地区から入所した人にとっても、第二の故郷になるのではないか。

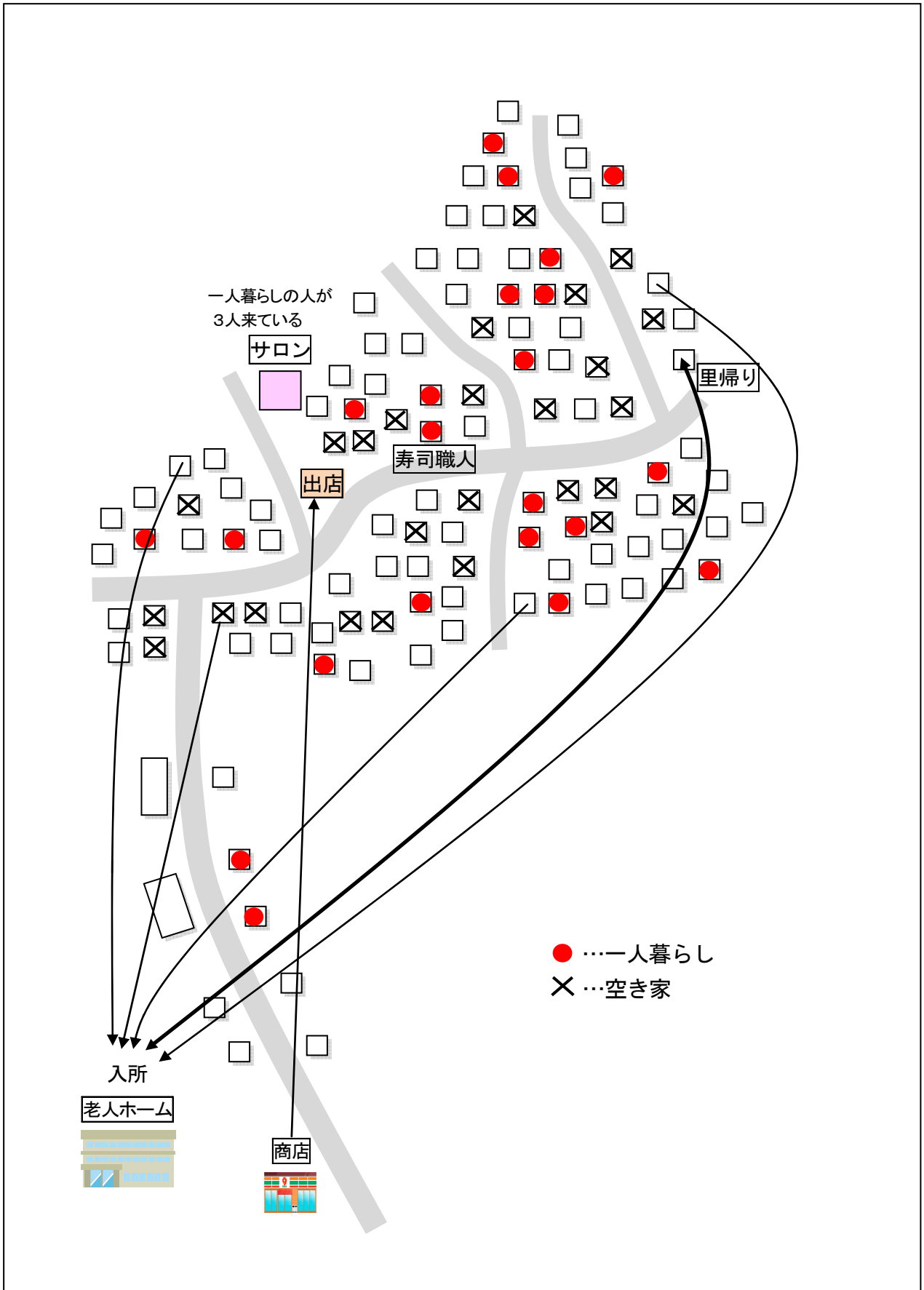
(3)すべての事業でご近所さんの参加が不可欠

例えば一人暮らし高齢者をサロンにという企画は、サロン関係者だけが取り組めばいいわけではない。その人と親しい隣人やご近所の世話焼きさんたちが声をかけることで実現するかもしれない。サロンから戻って、向こう三軒で二次会をするかもしれない。むしろこの方が大事なのだ。また、一人暮らし高齢者同士が誘い合うということもありうる。

寿司職人にしても、ご近所の親しい人や、自治会の役員が説得役として適任だという場合もある。おすそ分けの事例を見つけ出すのはご近所さんの情報だ。

出店した商店を充実させるには、ご近所の人たちが協力しなければならない。一方で本店への働きかけは、自治区の役員や地区社会福祉協議会の声掛けが効くかもしれない。商店会の協力が効くかもしれない。

老人ホームの協力を得るには、民生委員や地区社会福祉協議会の働きかけが必要かもしれないし、入所者の里帰りや逆デイを実現させるにはご近所さんや隣人の協力が欠かせない。空き家を使うとなれば、持ち主の協力が必要だ。



11. 支え合いマップから出発

ご近所発の地域福祉は、ご近所ごとに支え合いマップ作りをすることから始まる。繰り返し述べているように、マップを作らねばご近所の助け合いの実態は見えてこないのだ。それが見えねばご近所支援の方策は出てこない。それ以上前へは進めない。

(1) 支え合いマップづくりとは何か？

ご近所ごとにご近所さんが集まって、模造紙大の住宅地図の上で、住民の関わり合いを線で結んでいく。これによって、要援護者やその人に関わっている人、ご近所の課題などが浮き彫りになる。



(2) マップづくりで見えてくるもの

① 推進する「ご近所」の範囲が特定できる。

地域福祉をご近所ごとに推進していく場合、「ご近所」の範囲はどこからどこまでなのか、マップづくりをすると見えてくる。50世帯にこだわるのではなく、場合によっては30世帯が妥当な地域かもしれない。

かなりの大型世話焼きが居て、相当数の人の面倒を見ている地域の場合、80世帯ぐらいでも助け合えるご近所かもしれない。逆に助け合いの機運がまだ生まれておらず、隣近所の助け合いさえできない地区では、班単位で進めた方がいい。

② ご近所福祉推進体制が見えてくる。

マップを作れば、大中小の世話焼きさんが発見できる。その人たちの役割分担もわかってくる。小ご近所ごとにどう役割分担しているかも見えてくる。これをもとにご近所福祉推進体制が構想できる。

このご近所をサポートするご近所福祉サポーターがだれなのかも見えてくれば

なおいい。実質的にその役をすでに果たしている人を探す。大型世話焼きさんが、隣接のご近所も含めてサポーターの役割も果たしているかもしれない。

③そのご近所の当面の取り組み課題が見えてくる。

取り組み課題とは、そのご近所が抱えている問題と解決策をプラスしたもの。マップで両方がセットで見えてくる。各層での当面の取り組み課題も見えてくるのではないか。

(3)マップづくりのすすめ方

マップ作りで成果を上げるには、以下の点を厳守し、妥協をしないことが重要だ。

①社会福祉協議会や民生委員が、対象ご近所の範囲を決定

(およそ50世帯を厳守)。

②そのご近所に在住の数名(5名程度)に集まってもらう。

1人2人ではマップは作れない。それぞれの人が自分の周囲、10世帯程度のことしかわからないということを頭に入れておく。

③模造紙大の住宅地図に太いマジックで記入していく。

せめてAゼロ大に。1時間半ほどかける。そのあと、取り組み課題をまとめる。

④要援護者に誰が関わっているか、ご近所の福祉課題は何かなどを探る。

要援護者の問題だけでなく、地域住民にとっての住みづらさもテーマにする。

⑤当人はどうしたいのか、住民はどうしてあげたいのかを探る。

こちらの問題解決のやり方は引っ込めて、あくまで住民の努力を尊重する。

(4)プライバシー問題にどう対処するか

個人情報やプライバシーの問題を持ち出す人が出てくる。以下の点を心得ておく。

①マップづくりは、ご近所の人たちが域内の気になる人について、互いの情報を持ち寄り、より良い関わり方を考える場—つまりご近所ケア会議だ。

②(自治会長や民生委員を通して)行政からの個人情報を持ち込む必要はない。ご近所の人で十分。

③ご近所内では、助け合いをするために、どうしても情報を共有する必要がある。50世帯では広すぎて、自分の情報を開示する勇気が出ない場合は、班内だけでマップづくりをするという手もある。特に災害対応の場合はこれでいい。

④マップで得られた情報をご近所外に広げる必要はない。これは一種のケア会議なのだから、マップづくりに集まった住民の中の精鋭だけが知っていればいいことだ。マップづくりに参加していただく住民は、初めからそういうご近所福祉を担ってくれる人に絞るということも。

⑤助け合いをするためには「プライバシー尊重」などと言っていては始まらない。中には「自分のことを話題にすることも許さない」などと主張する人もいるが、そのような人の主張を鵜呑みにすれば、何か起きた時にその人の命は救われない。災害が起きた時も、真っ先に駆けつけられるのはご近所の人なのだ。何よりも命を守るのだという、毅然とした姿勢を保持する必要がある。